

---

# バカと少女と召喚獣

亜花寝子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと少女と召喚獣

### 【Zコード】

Z2801X

### 【作者名】

亜花寝子

### 【あらすじ】

科学とオカルトと偶然によって完成された「試験召喚システム」を導入した文月学園。

Fクラスに入ることになった関根 せきね 朔夜は、幼馴染である吉井明久や坂本雄一、Fクラスの仲間達と打倒Aクラスと奮闘するのだつた！

## プロローグ（前書き）

始めて、亜花寝子です

初投稿であります！

グダグダですがご了承ください（苦笑）

それでは、最後までよろしくお願ひします

## プロローグ

私がここ文月学園に来てから2度目の春が訪れた。桜が満開に咲き誇り、これから学園生活を始める新入生を歓迎しているようだ。

見とれるような美しさであったが私はこれからの学園生活とクラスについて頭がいっぱいだった。

「関根、遅刻だぞ！」

私が校門を通り校舎に入ろうとすると呼び止められた。

「あっ、鉄人先生。おはようございます！」

「鉄人じゃなく西村先生と呼べといつもいっているだろ？？」

この、黒い素肌にスースツ姿の人物こそ、文月学園、生徒指導担当の西村教諭である。

趣味はトライアスロンと、いかにもスポーツができそうな先生だ。

「ほら、受け取れ、これが試験の結果だ。」

てつじ・・・西村先生から一つの封筒を受け渡された。

「お前ほどの実力があればAクラスなど簡単に入れただろ？」

「ということはAクラスじゃなかつたってことですね・・・残念です。」

Bクラスか・・・それにしてもなかなか封筒があかないんだけど…

「一言言わせてもらつてもいいか？」

「別にかまいませんよ～、減るもんじやないです～」

よつやく封筒の中の紙を取り出し、開いた、そこに書いてあつたは・・・

「次からは名前くらいちゃんと書け」

関根 朔夜 “Fクラス”

「絶対いやあああああ！…！」

悲鳴の叫びが校舎全体にこだました。

ここから私のFクラスでの学園生活が始まっていく。・・・。

## プロローグ（後書き）

まだまだ冒頭ですけど、いかがでしょうか？  
楽しんで読んでいただいてたら嬉しいかぎりです  
感想やご意見がありましたらお待ちしています

## 第一問（前書き）

読んでいただく人がいて嬉しいです  
今回も楽しんでいただければ幸いです

## 第一問

「はあ・・・、Fクラスか・・・、それも名前を書き忘れてつてえ！」

愚痴をこぼしながら重い足を引きずりながら自分に割り振られたクラスに歩き出した。

「これからは問題を解く前に名前を書いて、うん・・・」と、一人で決心しているとバカでかい教室が見えてきた。

「うわあ～、ここの名前を書いてたら私のクラスだったAクラスかあ・・・」

Aクラスの前で足を止め、大きな窓から中を覗いてみると、スーツを着こなし、知的女性の教師が立っていた。その後には、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大引き「ラズマティスプレイ」に「高橋 洋子」と表示されていた。

「皆さん進級おめでとうございます。私はここの一年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願ひします。」

あの「ラズマティス」らしい・・・などと考へていると聞きなれた声が聞こえてきた。

「うわあ～、システムティスクにリクライニングシート、ノートパソコン支給かー、いいなあ！Aクラス～」

ふと隣を見ると幼馴染が私と同じように窓からAクラスをみて羨ましそうに声をあげていた。

「アキくん？どうしたのこんなところだ？」

「うわつ！？・・・朔夜？」

まったく・・・、幼馴染の顔まで忘れるほどのバカだったなんて・・・

「ねえ、今さらうとひどい」と言つたよね！？」

「えつ？なにが？」

もしかして心の声が読まれてる…？それともついつい本音を言つてしまつ

ちやつた！？

「また罵倒された氣が……まあ、それはおいといて、朔夜はAクラスでしょ？クラスの中に入らないの？」

「ん？私ね、ちょっとしたミスでAクラスに入れなかつたんだよ～名前を書き忘れるといつぱりよつとしたミスをね」

「バカだつ！？」

「あ・・アキくんにバカつて言われた……」

アキくんにバカつて言われるなんて……屈辱だよ！

「で、どこのクラスになつたの？Bクラス？」

「アキくんにバカつて言われた……」

「ねえ！まだ言つてるの！？」

だつて2年を代表するバカにバカつていわれたんだよ！？この私が！「で、結局どこのクラスになつたの？修羅のさ「それ以上言つたら殺すよ？（殺氣）」めんなさいい！」

すぐさま土下座を始めるアキくん。

「そのあだ名は言わない約束だよね？」

そう、昔、私は修羅の朔夜と呼ばれていた頃もあつたが、ある時を境にその名は消えた……、そつある時を境にして

「だつて、昔、そう呼んでくれつて言つたのは朔夜のほうだよ？」

「昔は昔、今は今なの……」

そう、生まれ変わろうと思つた日から。

「つて、朔夜、そんなことより早く行かないと遅刻しちゃうよ？」

「そんなことじゃないの私にとつてわー！それもアキくん、もう十分遅刻してくるか！？」

「ええー、つてそつだつたね」

まつたくもう・・・と私はため息をつき、アキくんの肩を叩く

「ほらつ、早く行こうよ、アキくん！」

私は自分のクラスに向かつて走り始めた、その後を追つよつてアキくんも走り出し

「結局、朔夜つてクラスなんなのやー！」

「いや、名前を書き忘れたんだからテストの点数が〇でしょーう！」  
「そつかあ～、じゃあFクラスだね・・・えつ・・・Fクラス？」  
「やうだよ、早く行くよ、アキくん！~どつせFクラスでしょ」  
「どつせつてなにさあ～まあ・・・Fクラスだけどさ！」  
「あはは、と私は笑いながら自分のクラスへと駆けていく。  
「ま、まつてよ朔夜ーー！」

## 第一問（後書き）

修羅と呼ばれていた朔夜、そしてある時を境に・・・。  
朔夜にいつたににがあつたのか・・・。

まあ、この話はまたいつか書きたいと思つております  
自分で書いておいて言つのなんだけどグダグダだ（苦笑）  
お楽しみいただけていたら幸いです、感想などお待ちしております

## 第一回（前書き）

久しぶりに部活やつたら疲れたよぉ・・・

## 第一問

「もう、アキくんのせいで遅刻しちゃったじゃん！」

「僕だけのせいだけじゃないよね！？」

「なにを言つ、アキくんがいなければ話し合わなかつたもん！」

「てか、初日から遅刻しちやつて皆に悪い印象を持たれないかな？」

「大丈夫じゃない？ 早く入つてよアキくん！」

「考えすぎか、といいながらアキくんは扉を開けた。

「すいません、ちょっと送れちゃいましたつ」

「早く座れウジ虫野郎！」

「うわあ～、悪い印象持たれたな～絶対に！」

「・・・雄一、なにやつてんの？」

「・・・ん？ 雄一って・・・、まさかっ？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がつてみた」

「ということは、坂本がクラス代表かあ・・・、嫌だなあ・・・振り

分け試験の日になんて名前書き忘れたんだろう私！」

「先生の代わりつて、雄一が？ なんで？」

「一応このク「代表だからだよ、アキくん！」・・・なぜここにいる？」

そう説明しながらクラスの中に入つていく私を教壇の上から見下ろ  
している坂本。

「遅れてしまつてすいませんでしたあ～」

「俺の質問は無視かつ！？」

クラスの中に完全に入つた瞬間、Fクラスの男子が騒ぎ始めた。

「じょ・・・女子が来たあああ～！」

「なにあの子？ すつげー可愛いじやん！」

Fクラスつて男子ばつかりだね・・・、うん。

「みんなよろしくね（一二コラ）」

「「「ひやつほ――――――！」」

な・・・なんなのこの歓喜の声わ！氣持ち悪い！

「・・・どつかで見たことあるんじやがな。」

どこからか何かを呟く声が聞こえた氣がある・・・まつ、氣のせいだよね。

「おいつ！だから俺の質問に答える！」

えつ？なんか質問されてたつけ私？

「えつ？なにが？みたいな顔してるんじやねえよ。」

あれ、顔にてたかなあ？

「ちよつと、凡ミスしちゃつてあー、よろしくね、悪鬼羅刹」

「・・・ほお、凡ミスでお前がFクラスだと？きちんと説明してみな？」

にやにやしながらそり言つてくる、絶対わかつて言わせようとしたがつてるな・・・ムカつく！あのにやにやした顔がムカつく！あの顔がホントムカつく！

「おいつ！どんだけ罵倒すれば氣が済むんだよ。」

・・・アキくんといい、坂本といい、なんで心が読めるのか不思議でたまらないよ・・・、そう思つていると後ろから声が聞こえてきた。

「えーと、ちよつと通してもらえますかね？」

後ろには寝癖のついた髪によれよれのシャツを着て、冴えないおじさんがたつていた。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

ああ・・・こここのクラスの担任かあー

「はい、わかりました」

「うーつす

「ア解です」

私とアキくんと坂本はそれぞれ返事をして、適当な席（？）に座る。

「えー、おはよづじぞいます。一年F組担任の福原慎ふくはるしんです。よろしくお願ひします」

福原先生が後ろにある薄汚れた黒板に名前を書いづらしてやめた。

えつ？もしかしてこここのクラスつてチョークすらまともに置かれてないわけ！？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は至急それていますか？不備があれば申し出てください」

「Aクラスとは天と地の違いなんだね！うん！」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風邪が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を真性しておきましょう」

ダメだ、私ここで1年間暮らす自信がないよお！なにこの教室！？廃屋かなにかかなあ！

「必要なものがあれば極力自分で料立つするよつとしてください」教室全体からかび臭い独特の匂いが漂つ、きっと古い畳のせいじゃないかな。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

先生の指名を受け、廊下側の生徒のひとりが立ち上がった、・・あれ、どこかでみたことがあるような？

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

・・・木下・・・秀吉？？

「 というわけじゃ、一年間ようしくたのむぞい」  
どこかで見たことあるような男の子なんだけどなあ・・・、ていうか、Fクラスの男子（坂本を除く）みんながあの子のことを見るように目でみてるよね・・・。

「・・・・・・土屋康太」

ん~、小柄な子だなあ~、それにしても口数少ないよね・・・、もう少ししゃべればいいのに、それにしてもこのクラス女子が少ない

よね、てか、私以外に女子いるの・・・?といろいろな考え方をして  
いると

「　　です。海外育ちで日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

「あつ、女子の声だ！よかつた、私以外に女子がいて」「趣味は吉井明久を殴ることです」

卷之三

それもしい趣味をしていなね！あの子とは気が合へそ二、たなあ！  
後で話しかけてみよ~つと。まあ、隣でアキくんが泣きそうな顔をして  
しているのは気にしない、気にしない

卷之三

笑顔でいきましょう

ふ～と・・・、あの木の畠で畠田れどいにいただく・・・覚えておかなければ

- てある。 1831年

なしからなあう

おっ、きたなアキくん！アキくんない

待のまなざしでみてみるとアキくんがこっちを見て固田をつぶつた、  
ごく普通の二三毛のうららららアキくん

「ダアアーリイーン！」

ふはっ！『気軽にダーリンって呼んでくださいって、それもFクラスのほとんどがダーリンって呼び始めるとか、このクラスできるなっ！それもアキくん不愉快そうな顔してると、自分で呼んでください

「 て、 あなたが いい ですか？」

「失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願ひ致します」

声で大命懸けられたら仕方ないよね。」

「です、一年間よろしくお願ひします」

自己紹介は進んでいい、そろそろ私の番になろうとしていたとき、不意に教室のドアが開き息を切らせて胸に手をあてている女子高生が現れた・・・あの胸、髪の毛・・・まさか!?

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えつ?』

教室全体から驚いた声があがる、そりゃそうだしじょ、普通驚くよね!「丁度よかったです。今自己紹介をしてこられたこのひななので姫路さんもお願ひします」

「は、はい!あの、姫路瑞樹といいます。よろしくお願ひします。・・・」

やつぱり、みーちゃんじやん!それにしても学年上位のみーちゃんがこんなFクラスに?』

「はいっ!質問です!なんでここにいるんですか?」

まあ、普通そんな質問するよね~、私のときはそんな質問しなかつたくせに・・・まあ、仕方ないか~

「や、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました。・・・

なるほど、途中退席するとテストの点数が〇点扱いされちゃうんだよねたしか

「で、ではっ 一年間よろしくお願ひしますつー」

うへん・・・やつぱりみーちゃんは可愛いなあ~

「あ、緊張しましたあ~・・・」

席につくや否や、安堵の息をついて卓袱台に突つ伏すみーちゃん、そこにアキくんが話しかけようとしている、がつ、坂本が声をかぶせるようにみーちゃんに声をかける、あれだな、ビツセアキくんのいやがらせだらけ。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか?」

「あ、それはほ~みーちゃん!久しぶり~」つて朔夜!~朔夜も

僕の邪魔をするの！？  
「ふつ・・・・もちろん！！」

## 第一問（後書き）

・・・すいこながくなつてしまつたよつな  
どこで切つていいかわからずつにつにこじまでw  
それも中途半端なところで切つてしまつた（苦笑）  
感想などお待ちしておつまし

## 第三回（前書き）

ちょっと風邪気味でして、見直してみたら誤字が多くなったよ（苦笑）

## 第二問

「えっ？ さ・・・ やくせちやん！？」

「なんだよみーちゃん、親友の顔も忘れちやつたの？」

アキくんといい、みーちゃんといい、なんでそんなにビックリするかなあ・・・

「ど、どうしてみーちゃんがここにへやくせちやんだつたらACKラス確定でしょに・・・」

「うーん、それがさあ、名前書き忘れちやつてあ～」

「そ、そりなんですか、ちゃんと名前くらいい書きましょうね？」

「そうするよ」

「でー？ 僕は無視なの！？」

「あ・・・ 明久君！？」

ちつ・・・、せつかくみーちゃんと話してたのになんで入つてくるんだよアキくん！

「姫路。明久がブサイクですまんさ、さすがに言いすぎじゃない坂本・・・

「や、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ・・・・・・ああ、そういうば、みーちゃんつて・・・ふふ」

「そう言わると、確かに見てくれば悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持つてている奴がいたような気もするし」

「え？ それは誰？ そ、それって誰なんですか！？」

アキくんの言葉を遮るように聞くみーちゃん、まあ、そうだよね、なんせみーちゃんは・・・ふつふ

「確か、久保

「久保？ 久保さんなんていたけかな・・・？」

「利光だつたけかな」

ぶつ　久保利光つてたしか学年次席（ ）だったよつな

「・・・・・・・・・・・・」

「アキくん、そんな声を殺してためざめと泣かないの」

アキくんの頭を撫でてあげるとアキくんは少しおちついたよつだ

「あつ・・・・・さくやちやんするいです・・・・」

みーちゃんが私にしか聞こえないくらいの小声でそんなことを言つてきた、みーちゃんもすればいいのになあつて無理か

「半分は『冗談だ、安心しろ』

「え？ 残りの半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「するい・・・・・あ、はい？ 体はもうすっかり平氣です」

「ねえ雄二！ 残りの半分は！？」

アキくん必死だなあ、まあ、同姓からの好意だからね、てか、  
声大きすぎ

「はいはい、そこの人たち、静かにしてくださいね」

ほら、そのせいで先生に教卓を叩いて注意されちやつたじやない！

「あ、すいませ

」

バキイツ バラバラバラ

先生が叩いた教卓がゴミ屑と化した、どこまでばろかつたんだろう。

・

「え・・・・・替えを用意してきます。少し待つてください」

先生が氣まずそうに告げて急ぎ足で教室をでていつた。

「・・・・雄二ちよつといこ？」

「ん？ なんだ？」

「ここじや話しこくいから、廊下で」

「別に構わんが」

あれ、どうかしたのだろうかアキくんと坂本は、廊下でなにか話し合つてゐみたいだけど・・・・まさか、アキくんが坂本に愛の告白！

？　まあ、違うだろ？　けど面白そうなことにかわりないし行こうかな

「みーちゃん、ちょっと廊下行ってくるね～？」

「えっ？ はい。わかりました」

静かに廊下にでると、アキくんが真剣な表情で坂本に話していた。

・・まさか本当に愛の告白！？

「折角一年生になつたんだし『試合戦争』をやつてみない？ それも

Aクラス相手に」

試合戦争・・・？ ああ、一年生からできるクラス対抗の戦争だっけ？

「・・・何が目的だ」

「いやだつてあまりに酷い設備だから」

「まったく勉強に興味のないお前が、今更勉強設備なんかのために

戦争を起こすなんて、そんなことありえないだろ！」

「そ、そんなことないよ興味がなければこんな学校にくるわけ

」

「嘘をつくな、お前がこの学校を選んだのは『試験校だから』その学費の安さ』が理由だろ？」

おお、さすが頭の回りが速い坂本だね～、どんどんアキくんが追いつめられていくよ

「あー、えーっと、それは、その・・・」

おっ、もうアキくんは良い言い訳が見当たらないみだね

「・・・姫路の為、か？」

「ど、どうしてそれを！？」

「そ、うか、みーちゃんの為にアキくんが戦争を起しあうとしてるなんて、私感動だよ」

「つて、さ・・・朔夜！？ い、いつからそこ！？」

「えつ、最初から？ 坂本は気づいてたぽいけど」

ちょくちょくこっちを見てきてたからなあ～

「まあ、気づいてたがな、それにしても明久はカマをかけるとすぐ

に引っかかる」

「ホントだよね、なんでこいつ簡単にカマにかかるんだろ？」

「は・・・ハメられた！」

ハメられたつて、勝手にはまつただけじゃ。』

「まあ、俺自身もAクラス相手に試験戦争をやるひつと思つていたところだ」

あれ？坂本もやるひつと思つていたの……ひつしてだらひつ、坂本も設備なんて興味なさそうなのに……

「え？どうして？雄一だつて全然勉強してないよね？」

「世の中学力が全てじゃないつて、そんな証明したくてな

「ふ～ん、世の中全でが学力じやないねえ～」

「……やめろその目は、氣色悪い」

なつ！？可愛い可愛い少女にたいして貴職悪いなんて失礼な！

「どういうこと？？？」

「アキくんはわからなくていいんだよ！」

そう、私は坂本の過去を知つているから分かるだけだけど

「まあ、Aクラスに勝つ作戦も思いついたしな

おつと、

先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

「後でその作戦とやらをちやんと話しなさいよね！」

ああ、言われなくてもとと言いつつ、坂本は教室に戻つていいく

「アキくん、みーちゃんのために頑張るからね！」

みーちゃんは比較的に体が弱いからFクラスの設備じや体を壊すだ

ろうと思つてのアキくんの優しさだと思つからね

「えつ、朔夜も手伝つてくれるの？けど、朔夜勉強はあんまりやる気ないんじゃ……」

「いいの、そういう優しいアキくんを手伝いたくなつちやつたんだ

よ それに私の能力を知らないわけじゃないでしょ」

「そう、私の能力……、それは”絶対記憶能力”

「うん……知つてるけど、テストとかあんまりできてるイメージないんだけど？」

「アキくんに言われたくないよーまつたく……初めてのテストの日の順位を忘れたんだね……まあ、Fクラスのみんなも忘れてた

みたいだけね」

そんなことより早く入りうるとアキくんの脇中を押しながら教室に戻っていく

「さて、それでは自己紹介の続きをお願ひします」

あつ、そういうえば次私の番じゃん……、どうしよう、考えてなかつた、まあ、大丈夫か

「ああ、と、櫻井君ですか？ 一金間 うんじくおれが お えつ！？ なになに！？」

「……………」

ときの子かの「？」

そこには、一番最初に紹介をした木下秀吉で子がたてていた・・・・・どうかで見たことある顔なんだよな・・・・・それも口調も・・・・・ん?あのとき?

ああ！！！！！思い出した！あのとき私を助けてくれた人！！  
そう、私が生まれ変わりたい、そう思った日のできごとの張本人だ。

「あのときは大変お世話をなじました」

モハレシナカム頭をくじにと正三郎と叫びてゐる

## 「おめでたし」

—そ、そうですね、わ、私もヒッケリしました

「まあ、これからもよろしくたのむぞ。」「

秀吉くんが席に着いたので私も席に着いたら ドテッ

バランスを崩して倒れてしまつた

「あいたたたあ・・・」

「おぬし、大丈夫かのう？」

手を差伸べてくる人がいた、その手に私は捕まり  
「ありがとうね・・・つて秀吉くん・・・？」

「ん？ どうしたのじや？ 「ボンツ」つて、おぬし、大丈夫かのう？  
異常に顔が赤いがのう？」

「だ、だだ、大丈夫だから」

そういうと私はすぐさま手を離し、席に着いた、そこにみーちゃん  
が耳元で小さな声でこういつてきた

「さくやちゃん、秀吉くんのことが好きなんですか？」

「そ、そんなことないよ！」

「ふうん、けどお顔真っ赤ですよ？」

「うう・・・、そんなに赤いかな・・・？」

「さくやちゃん、その反応からすると秀吉くんのことが好きみたい  
ですね」

「うう・・・、内緒だよ？」

わかつてます、といつてみーちゃんは前を向き始めた、そう、秀吉  
くん、そう木下秀吉あの口、私の日常を大きく変えてくれた、私は  
その日からあなたの」とばかりずつと思つていた・・・。

## 第三問（後書き）

やばい、どの方向に進んでいくんだこの小説わ！（苦笑）  
感想などお待ちしております～

#### 第四問（前書き）

完璧風邪をひいてしまった亜花寝子です（苦笑）  
父親にやさを止められないうちに更新するんだい！！

## 第四問

「 です、よろしくお願ひします」

順調に自己紹介も進んでいき、最後に残つたのは・・・

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれ、このFクラスの代表、坂本が教壇に立つ、さて、坂本はどんなことを言うのか楽しみだね

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ

好きなように・・・? だつたら

「よろしくね~、”霧島”雄一”

「さて、皆に一つ聞きたい」

あれ? 無視かな? それとも聞こえてないのかな?

「”霧島”雄一?、お~い、”霧島”雄一くん~?」

「表に出やがれ! 朔夜!!

「望むところだよ!」

「・・・・・・・・・!」(ガンのくれ合い)」

「坂本君、関根さん、やめなさい。坂本君は自己紹介の続きですよ」

ふん、先生が止めるのなら仕方がないな・・・

「朔夜、霧島つてどういうこと?」

ふと、アキくんが私に聞いてきた、あれ? アキくんは知らないのか?

「それはね~、きりし「それ以上言つと昔の通り名をここで言つぞ

?」・・・・アキくん、忘れて」

えつ~? という顔をしているアキくん、もう修羅なんて呼ばれたくないんだよ、それも秀吉くんがいるから余計に

「皆に一つ聞きたいことがある」

そう言つたあときつし・・・もとい、坂本は教室を見渡す

## かび臭い教室

### 古く汚れた座布団

### 薄汚れた卓袱台

「設備に不満はないか?」

「「「大ありじゃあつ！！」」」

二年Fクラスの魂の叫びが教室全体にこだました

「どうう?俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『「そうだそだ!』

「いくら学費が安いからと言つて。この設備はあんまりだ!改善を要求する!』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ?あまりに差がひどすぎる!

次々と不満の声が飛び交う、まあ、Aクラスはすごかつたよね~・・・

・名前書いときやよかつたよホント

「そこで代表としての提案なんだが

おつ、坂本は引くつもりだね・・・戦争の

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよ

うと思つ

坂本、いや、Fクラス代表は戦争の引き金を引いたのだった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

「姫路さんがいたら何もいらない」

「俺も関根さんがいるのなら何も望まない」

だれ?私とみーちゃんにラブコールを送る人は!みーちゃんはわかるけど、なんで私にまで!?

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」たしかに、普通ならFクラスがAクラスに勝てるはずがない

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろ？』

『何の根拠があつてそんなことを』

だがこのFクラスは一味違う

「根拠ならあるさ。このクラスんみは試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃つていてる」

「なんせ、あの坂本が勝てるといつくらいだからね

「それを今から説明してやる」

根拠があるつて顔をしているFクラスに坂本が説明を始めた

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「・・・・・・！」（ブンブン）

「は、はわつ」

小柄な子は必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズを取る、  
ど・・・堂々とみーちゃんのスカートの中をみるなんて、やるね～  
「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者だ」  
「・・・・・！」（ブンブン）

ムツツリーーー！？あの子が！？土屋康太つて名前じやわからなかつたけどムツツリーーーとこいつ名はこの学園じや有名だー

『ムツツリーーだと・・・？』

『馬鹿ん、ヤツがそうだといふのか・・・？』

『だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そつとしているぞ・・・』

『ああ。ムツツリに恥じない姿だ・・・』

あんな小柄な子がムツツリーーーなんて・・・

「姫路のことは説明する必要もないだろ？ 頃だつてその力はよく知つてゐるはずだ」

「えつ？ わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

そりやそつだろ？、Aクラスで学年主席に匹敵するほどの実力者だからね～

『「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

『「ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

ねえ、さつきからみーちゃんにラブコールを送り続けてる人はだれ！？

「木下秀吉だつている」

えつ？秀吉くんも？

『「おお・・・！」』

『「ああ。 アイツ確か、木下優子の・・・」

『「たしか演劇部のホープだろ？」』

へ～、秀吉くんが優子ちゃんの弟で、演劇部のホープなんだ～

「当然俺も全力を尽くす」

『「確かになんだかやつてくれそつな奴だ』

『「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかつたか？」』

『「それじやあ、振り分け試験のときは姫持參と同じく体調不良だつたのか』

『「実力はAクラスレベルが一人もいるつてことだよな！」』

うつ、ひどいよねみんな！そりや確かに私は始めてのテストしか名前を残さなかつたとはいえ・・・忘れられるものなんだね

『「いや、実力がAクラスなのはもう一人いる』

みんなが驚いたような顔をしている

「おい、朔夜、お前もこつちに来い！」

「やれやれ、ようやく呼ばれたよ私・・・、一番最初に呼んで欲しかつたな～」

よつと、私は席を立つと教壇のほうに向かっていく

『「おい、あの子もAクラス並の実力者だつてよ』

『「あんな可愛い子までもAクラスの実力者だといつのか』

か、可愛いだなんて・・・／＼

「関根朔夜、皆も聞いたことがあるはずだ」

「みんなきょとんとした顔をしている・・・、ちくしょーーー！ 人ぐら  
い覚えててくれてもいいじゃないの！」

「・・・ふむ、知らんのか？ こいつは・・・始めてのテストで姫路  
に2000点以上の差をつけて一位をとったやつだ」

『な・・・なんだって！？』

『あの始めてのテストで一位をとったやつだと！？』

『へつへん！ 皆もようやく思い出したようね！』

『なんかAクラスに勝てる気がしてきたぞ！』

『やれる・・・俺らならやれるぞ！』

『それに吉井明久だつている』

・・・・・シーン

「ちょっと雄一ーー！ どうしてそこで僕の名前の呼ぶのさーーまったくそ  
んな必要ないよね！」

『誰だよ、吉井明久つて』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！ 折角上がりかけてた土気に翳りが見えてるし！ 僕は雄一た  
ちとは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを  
て、なんで雄一も朔夜も僕を睨むの？ 土気が下がつたのは僕のせい  
じゃないでしょー！」

はあ・・・・、折角いい感じだつたのにアキくんのせいで・・・

「朔夜！ なにこいつ使えないわ、みたいな顔してるのぞー！」

『ば・・・・ばかな！？ 顔にでてたの！？』

『どうか。知らないようなら教えてやる』

あつ、坂本のことと言つ気なんだ、まあ、私は関係ないしね～

「こいつの肩書きは”観察処分者”だ」

#### 第四問（後書き）

うう・・・父親に怒られたよ  
更新できなくなるかも知れないんで楽しみにしててくれる人  
ごめんなさい（土下座）

## 第五問（前書き）

いやあ～、風邪治つて熱が引いたと思つたら試験一週間まえでパソコン禁止になり、ようやくパソコンを触れたよお・・・

## 第五問

『・・・それって、バカの代名詞じゃなかつたつけ?』

クラスの誰かがアキくんが一番傷つく言葉を口にする

「ち、違うよ、ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「違うよ、坂本、アホの代名詞だつて」

「肯定するな、バカ雄二! それと朔夜バカもアホも変わらないからね!」

私は笑いながらアキくんをみていた

「あの、それってどういったものなんですか?」

みーちゃんが首を傾げて問い合わせてきた

「それはね、教師の雑用係つてところかな?」

「具体的には力仕事とかそういうた類の雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚獣でこなすんだ」

本来の召喚獣は物に触ることはできない、いわば幽霊みたいなものなのだが、観察処分者の召喚獣は特例つてわけ

「そりなんですか? それって凄いですね。試験召喚獣つて見た目と違つて力持ちつて聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

みーちゃんが目をキラキラとしてアキくんをみているがアキくんは

苦笑い

「そんな大したものじゃないんだよ」

「そうだよみーちゃん、所詮はバカのバカの代名詞だしね」

「うんうん、そういうこつて朔夜、さらうと酷い」といわ  
ないでよー」

えつ、事実は事実じゃん」と笑う私にアキくんはもう・・・とふて  
くされた

観察処分者の召喚獣は物に触れらぶんデメリットも当然ある、まず、  
召喚獣は教師の監視下でなければ呼び出すことはできないこと、召  
喚獣の負担は何割かがフィールドバックするということなんだ。

フィールドバックするらしい、フィールドバックとは召喚獣の疲労  
はアキくんに何割かの疲労をもたらし、召喚獣が受けた痛みはアキ  
くんに何割か帰つて来るというものである。

・・・てこうか、どうやつたらそんなことが可能なのかすこい気に  
なるんだよね・・・

『おいおい、』観察処分者』つてことは、試合戦争で召喚獣がやら  
れると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるつてこ  
とになるよな』

さすがに気づくよね、そつ、戦争なんてアキくんは痛い思いするだ  
けなんだけど

「アキくんなら大丈夫でしょ」

「気にするな。どうせ、いともいなくとも同じような雑魚だ」

「雄一に朔夜、そこは僕をフォローする台詞を言つべきところだよ

ね？』

えつ？ なんで私がアキくんのことをフォローしないといけないんだよ～

「とにかくだ。俺達の力の証明として。まずはDクラスを征服してみようと思う』

「うわ、すつごい大胆に無視された！」

あれ？ 坂本のことだからいきなりAクラスに勝負を挑むと思つてたんだけどな・・・

「皆、この境遇は大いに不満だろ？』

『当然だ！！』

『ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！』

『おおーーっ！…』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムティスクだ！」

『うおおーーっ！…』

「お、おー・・・・」

クラスの雰囲気に圧されたのか、みーちゃんは小さく拳を作り掲げていた・・・やっぱり可愛いな・・・

「明久にはDクラスへんの宣戦布告の使者になつてもらつ。無事大役を果たせ！」

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

まあ、普通は酷い目に遭うよね、だって下位勢力からの宣戦布告な

んて邪魔でしかないしね

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加える」ことはない。騙されたと思つて行つてみろ

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思つている

真顔で嘘をつくこのクラスの設備並みにひどい代表さんじゃないかな・・・

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

普通にその友人とやらを騙してゐんですけどー?  
騙されているとも知らずにクラスメイトの歓声と拍手で送り出されたアキくん、使者らしく毅然とした態度でDクラスに向かっていく。  
・、大丈夫かな?ちょっと心配になつてきた

数分後

「騙されたあつ！」

すこしの時間がたつてから教室に転がり込んで来るアキくんの姿があつた、制服こんなにもボロボロだった?

「やはりそうきたか」

「あつ、やっぱり分かつてわざと行かせたんだ」

「やはりってなんだよ！やつぱり使者への暴行は予想通りだつたんじやないか！朔夜も分かつてたんなら教えてよ！」

えつ？何で教えなきやいけないの？教えないほうが面白そつたじゃん

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」「当然でしょ、てか、坂本の言葉で騙される頭が悪いと思つよ」「少しは悪びれるよ！」

今思つたけど。アキくんと坂本つて友達つて呼べるのかな？

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あつ、そうだそうだ、アキくん大丈夫？」

みーちゃんと私はそつにながらアキくん近づいていつた

「あ、うん。大丈夫ほんとすり傷　　てか、朔夜が教えてくれればこんな傷負わなかつたんだけど？」

「ん？ そつにえはそつから、ごめんごめん、今度から極力教えてあげるよ～」

嘘だけどね

「吉井、本当に大丈夫？」

「平氣だよ。心配してくれてありがとつ」

「そつ、良かつた・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

「あつ！もうダメ！死にそう！」

島田さん・・・それは流石にひどいと私は思つよ・・・

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行つぞ」

「坂本、どうでもいいの！？」

「ああ、大丈夫だ。なにせ明久だからな」

「あつ、うん。そうだよね」

「どんな理由だよバカ雄二！それも朔夜は納得しないで！」

この教室で話すのではなく屋上で話すらしくさつき坂本が呼んだメンバー + 島田さんでミーティングを行つらしく坂本はクラスの扉を開けて屋上へと向かい始めたので私たちはその後を追つていった

屋上にて

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「まあ、してきてなくとももう一回アキくんが行つてくればいいことだしね」

「もう嫌だよあんな場所！一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお昼つてことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べろよ？」

今日の昼ぐらい・・・・は・・・・？

「ば・・・・バカ雄二！朔夜の前でなんてことをいつてくれるのさー！」

「ふうん・・・・私の前でねつ・・・・そういうこと・・・・

「ねえ、知ってるアキくん?」

「な、なにをかな?」

「私の携帯のアドレス帳に玲さんって名前があるんだけど~」「はつ、ははつ、だ・・・誰かなその人」

「今」こので電話して「ごめんさい! それだけは勘弁を」・・・じやあ、こので私に昨日の食事をいつて「らん?」「え、えつとお・・・水と塩と砂糖・・・かな」

「理由は?」

「今月はゲームとマンガがこいつぱーつて朔夜ー? 誰に電話しよつとしてるの!?」

ちつ・・・バレちゃったか、今のうちに玲さんに電話しておいたのに

「いやつ、玲さんに近況報告を・・・」

「や、やめてよ朔夜! 約束と違つじやん!」

約束? なにそれ? おいしいの?

と、アキくんとこんな会話を繰り広げてこると窓の視線がこじりを向いていた

「なんかお前ら夫婦みたいだな」

「さくやちゃん・・・まさか吉井君と」

「・・・・・・妬ましいほど羨ましい」

「あんた吉井とどんな関係なの?」

ただの幼馴染だと思うんですけど・・・てか、みーちゃんは私の好きな人を分かつてていつてるのかな!?

「本当に、あれ」「夫婦じゃの」「！」

「ひ、秀吉くん！ こんなただの幼馴染だから」

「朔夜……こんなのはひどいよ」

アキくんがこんなひて呼ばれたためか泣きそうになつてたけど今はそんなの関係ない！

「……あの、良かつたら私がお弁当作つてきましょうか？」

「え？」

「み、みーちゃん、お弁当作つて私がやるから……が、私にやらせてください！」

「えつ、で……でも」

「良いの、私が作りたいの、私がお弁当作つてくるから……」

「は、はい。やくやちやんがそこまで頼つたのない」

しぶしぶとみーちゃんは引いてくれた。

みーちゃんにお弁当作られたら皆の命が危なすぎるからね  
「……ふーん。関根さんつて随分優しいんだね。吉井だけに作つてくんなんて」

じつと私のことを睨んでくる島田さん……私は皆の命を救つてあげたのに！

「はあ……、分かつたよ、みんなの分も作つてくれれば良いんでしょ」

「わあー、朔夜の手作りなんて何年ぶりだろ？」「

「俺たちにもか？・・・まさか毒を盛るきかー？」

「みんなの分で毒なんか盛らないよ！ 坂本だけにだつたら分からなければ」

毒と詰つたらみーちゃんの料理のほうだよね……いや、あればどちらかといつと化学兵器並だよね

「それは楽しみじゃの」「

「…………（「ク「ク）」「

「…………お手並み拝見ね」

「やくやかやんつのお料理できただんですね」

失敬な、私はアキくんよりも料理がうまいんだからねつー。

そういうえば、秀吉くんにも食べてもらえるんだよね、いつも以上にはりきつて作らなきゃ

「さて、話がかなり逸れたな。試合戦争に戻るわ」

「雄一」。一つ気になつていたんじゃが、どうしてロクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃるわし、勝負に出るならAクラスじゃるわ？

「あつ、私もそう思つた、坂本のことがだからすぐにAクラスに戦争を起こすのかと思つたよ」

「そういうえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

まあ、考えがなかつたら殴つてたところだけね

「どんな考え方ですか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦つまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かつたかもしだれない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子を良くメンツ

見てみる」

「えーっと……」

そりや私とみーちゃんはAクラス並みの点数だからね、Eクラスなんて余裕だよ

「美少女が三人と馬鹿が一人とムツツリーが一人いるね」

「誰が美少女だと！？」

「ええ！？雄二が美少女に反応するの！？」

「・・・・・（ボツ）」

「ムツツリーにまで！？」

「私はアキくんに言われるほどバカじゃないよ！」

「朔夜まで！？どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない！」

「まあまあ。落ち着くのじや、代表にムツツリーに閑根」

うつ、秀吉くんに止められたやめるけど、止めてなければ殴つてたよ・・・

「そ、そうだな」

「そうだね、秀吉くんが言うなら」

「秀吉が言わなかつたらどうなつてたんだろ？僕」

頭が良くなるほど殴られてたんじやないかな

「ま、要するにだ姫路に朔夜が問題がない今、正面からやり合つてもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いってことだ」

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確實に勝てるとは言えないな」

「だつたら最初から目標Aクラスに挑もうよ」

「まあ、坂本にも色々とさしきかけた作戦としてロクラスに勝つ必要があるんだよね？」

「まあ、さしきつけ」とだ

廊下で言つていた勝つための作戦つことだよね

「あ、あのー」

「ん? どうした姫路」

「さくややちやんが言つた、さつを言いかけた・・・つて吉井君と坂本君とさくややちやんは前から試合戦争について話し合つてたんですねか?」

「ああ、それか。それはつさつき、姫路の為に明久に相談されて」

「それはそうとー。」

アキくんの照れ隠しなのか坂本の声がかき消されるほどの大聲を発した

「さつきの話、ロクラスに勝てなかつたら意味無いよ

「お前ら俺に協力してくれれば勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

根拠も無い坂本の言葉だったけど、その言葉で皆に火がついた

「いいわね。面白さうじやない！」

「そうじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかのつ

「・・・・・(グッ)」

「が、頑張りますつ

「私もできるだけ頑張つてみるかな」

打倒Aクラス、FクラスがAクラスを倒すという下克上が今ここから始まる・・・みたいな

## 第五問（後書き）

いやあ、ながかつたなあ

久しぶりの更新ということですごいグダグダ（苦笑）

本当は昨日更新するはずだったんだけど誤ってE S Cボタンを押して書いてたのが全部パーになってしまいまして（泣）

今日書くはずだった分もまとめて書いてやいました

朔夜たちは打倒Aクラスを倒すことができるのか！？

感想&amp;意見お待ちしております

## 第六問（前書き）

見てくれてる人がいるのかどうか不安な亜花寝子です w

## 第六問

～試験戦争Fクラス対Dクラス～

「ちくしょーーなんで私がテストを受けないといけないんだよー。」

「そりや、私たちの点数は〇点です。」

「つべこべ言わずに早くテストを受けてよ。」

そう、私とみーちゃんは戦争が始まった瞬間テストを受けていた

試験戦争前、クラスにて

「そういえば坂本、私とみーちゃんは点数がないんだけどどうすればいいの？」

「えつ？ なんで朔夜と姫路さんには点数がないの？」

「バカか明久。俺たちの点数は最後に受けたテストの点数……すなわち振り分け試験のときの点数になるんだ」

「そういうこと 私は名前を書き忘れて〇点で」

「私は途中退席なので〇点なんです。」

そう、不運にもAクラス確定だったのに〇点でFクラスに入ってしまったのですから

「まあ、点数の補充は戦争が始まってからやつてもらひ

「ちなみに坂本、私は最初から本気をだしたほうがいいのかな？」

「一ちゃんは△クラス並の実力者ってみんなに知られてるから最初から本気だらうけど、私は最初のテストでしか高得点をたたき出してないからあまり有名ではないからね

「ああ、そうだな。○クラス並の点数、一教科110点くらいを田安に補充してもらえると助かる」

「余裕だね、約10分程度で終わらせて寝かせてもらおうか」

「10分で終わるのか！？」といつも、終わつたらすぐに前線に行け

なつ、すこしの休息もないの！？

「△の、悪魔、悪鬼羅刹、変態！」

「いいたい放題だなおいつ！」

仕方ないな・・・15分くらいで終わらせるようにしてすぐに前線に行つてあげるか

（試合戦争Fクラス対○クラス）

「さて、約110点取るの終わつた～っと」

私は鉛筆を投げ出し卓袱台に突つ伏した

「つて、もう110点ですか・・・早いですね、本当に10分でですか」

「まさか本当に一教科10分でやるとわ

「あはは～、まあ、一教科くらい10分でできるよ。けど何教科も

受けたからさすがに疲れたよ

「そりやす」い早さでしたもんね

「途中から腕の動く速度がおかしかったぞ」

「はあ・・・・、みーちゃんも頑張ってね、じゃあ、私は前線に行つてくるよ」

「はい。いつてらつしゃい」

「おいつ！俺を華麗に無視だな！」

「私はテストを受けすぎて幻聴が聞こえるよつだよ・・・・、みーちゃん以外に声が聞こえる」

「俺がしゃべつてるからだろー。」

あれ、幻聴かと思つたら坂本だつた、まつたくわからなかつたよー（棒読み

私はみーちゃんに手を振りながらクラスを出た、ついでに田出る前に坂本のすねを蹴つたけどさて、のんびりのんびり前線に向かうとじよつかな

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

と、そこで聞き覚えのある声が聞こえてきた・・・島田さんかな？  
急いで駆けつけてみると島田さんが縦ロールの女の子に手を引かれ  
ていた・・・・、その先には保健室？

「ふふつ。お姉さま、この時間なりべつては空いてますからね

・・・へつ？

「よ、吉井、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

うん、だろうね。私から見てもそう思つよ

「殺します・・・。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します・・・」

「島田さん、君のことは忘れない！」

「まつたく、普通助けるよね・・・、Fクラス関根が召喚を行います試獣召喚」

『Fクラス	関根朔夜	VS	Dクラス	清水美春
科学	118点	VS	41点	』

魔方陣が描かれトンファーをもつた私の召喚獣が飛び出す・・・、つて武器はトンファーか、まあ接近戦は得意だけど

「じめんね、縦ロールの子」

いつきに縦ロールの子の召喚獣との距離を詰め、トンファーで殴りつけた

「島田さん、大丈夫だつた？」

「ええ、助かつたわ。ありがとう関根さん、補習の鉄じ  
村先生、早くこの危険人物を補習室へお願ひします」

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」

戦死するとあの鉄人先生の補習室行きになるのがルールだ、絶対行きたくないと私は思う！死なない程度にがんばりうー。

「そうだ、関根さんはやめて欲しいな、朔夜って呼んでよ  
「わかつたわ朔夜、ウチのことも気軽に美波つて呼んで頂戴」  
「わかつたよ美波ちゃん」

美波ちゃんと仲良くなれたのはいいんだけど……アキくん……

「吉井」「アキくん」

「島田さんに朔夜、お疲れ。とつあえず島田さんは一度戻つて化学のテストを受けてくるといつよ」

「吉井」「アキくん」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ」

「吉井いつ！」「アキくん！…」

「は、はいつ」

「……美波ちゃん（ウチ）を見捨てた（わ）よね？」

「……記憶にございません」

「……」

「……」

しばしの沈黙。アキくんがそこまでバカだったなんて……私はがっかりだよ……。

「美波ちゃん、アキくんの処分はまかせて まずは化学の点数を補充してきなよ

「ありがとう朔夜、そうするわ」

私は美波ちゃんに手を振ると、アキくんの方に振り返った

「……なにか言い残すことわ？」  
「……本当にすみませんでした」

## 第六問（後書き）

勉強しなきゃ・・・

ご意見、ご感想お待ちしております

## 第七問（前書き）

学校を休んでしまったので続きを・・・

## 第七問

「わかつたアキくん！ちゃんと助けなきゃいけないんだからね！」

「・・・はい。本当にごめんなさい」

説教を開始してから10分くらいたつかな、まあ、アキくんも反省してるしもうここいらへんでやめてあげようかな

「もう今度はきちんと助けてあげるんだよ？」

「うん。わかつたよ」

「さて、戦争に戻りますか、今は一体どんな状況なのアキくん」

アキくんは中堅部隊長だからね、秀吉君とかが点数を補給してる間はここを通すわけにはいかないんだよね

「吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り一人だ！」

「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！援護を頼む！」

「藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやつてくれ！」

私が思つてた以上に劣勢みたいだ

「布施先生側の人たちは召喚獣を防御に専念させて！五十嵐先生側の人は総合科目の人と交代しながら効率良く勝負をするよ！」に！藤

堂君は・・・朔夜頼めるかな？」

「ふうん、アキくん、部隊長らしくてかつこいいじゃん。いいよ、

藤堂君は私が助けにいつてあげるよ」

『了解！』

『関根さん、藤堂君はこいつちだ』

藤堂君を助けに私は戦場へと出向いた、アキくん本当に部隊長らしく的確な指示をだしてたなあ・・・。

「藤堂君へ、助けに来てあげたよ~」

「おっ、関根か、すまない。」

「一年Fクラス関根朔夜、召喚します。試獣召喚<sup>サモン</sup>」

『Dクラス 鈴木一郎 VS Fクラス 関根朔夜  
化学 92点 98点』

ああ、やつぱりさつきの戦いで少しばかし点数を削られちゃってたか、まあ、点数はほぼ互角だし勝てるでしょ

「Fクラスが俺の点数を超えてるだとー?」

「むつ・・・・、ちょっとムカついた、とつとつ片付けるよー。」

幸いで相手も近接武器なので距離を詰める、ていうか詰めないと当たらないもん・・・・投げてみる?

「ていつー。」

『Dクラス 鈴木一郎 VS Fクラス 関根朔夜  
化学 戰闘不能 98点』

どうじょう、トンファー投げたら当たっちゃった・・・、それも一

撃・・・。

「よし、さつさと連れてつてください、鉄じ 鉄人先生」

「関根、それは言い直してないじゃないか、まあ、戦死者は補習」

鈴木君は鉄人に抱がれて補習室に連行されていった。南無ニ。

「さて、こんなに早く相手が倒れるとは思ってなかつたからな、どうしようかなあ～」

「ふう、まあ関根ありがとう、もう少しでの地獄の補習室に行くところだつた」

「ん? 別に大丈夫だよ。」

藤堂君にお礼され、藤堂君と一緒に中堅部隊がいるところに戻つているとときスピーカーの雜音が聞こえてきた

《連絡致します》

あれ、この声は須川君・・・?

《船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待つています》

ゑ?

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるやつです》

えつ・・・と、アキくん? どういうこと?

私と藤堂君はよく意味がわからず、急いで中堅部隊がいる場所まで戻るところには

「須川ああああああああ！」

と、叫びながら血の涙を流したアキくんの姿があった

「アキくん、藤堂君助けてきたよ、それと・・・、アキくんつて船越女史が好きだつたんだね・・・」

「『、誤解だよ、あれは作戦つていうか

「さ・・・作戦か、よかつた。」

みーちゃん良かつたね、後で言つといてあげないと

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻つてこない！やられたのかー？」

さつきの放送でFクラスの士気が上がつたらしい。  
けど、残念ながら戦力差の影響が現れ始め、次々と悪い報告が聞こえてきた

「そろそろやばいんじゃないのアキくん？」  
「そうだね、18人もいた部隊だつたのに」

工藤君と森川君が戦死、せつかく助け出した藤堂くんも戦死してしまい

これで部隊は私含めて6人になつてしまつた

「明久に朔夜、あと少し持ちこたえろ！」

アキくんと撤退のことを考え始めたときにそんな檄が飛んできた。  
後ろには、援軍を率いた坂本がこちらに向かつて走つてきた

「援軍だ！合流される前に吉井たちを全滅せり！一面倒なことにな  
るぞー！」

Dクラスの前線部隊長の塙本君の指示がこっちに聞こえてくる  
けど、マズい。坂本たち援軍はまだまだ遠い場所にいる、なるべく  
は全員補習行き避けたいところだ

「西村雄一郎、戦死！」

これで残りは5人、ええい、仕方ない。私が戦死覚悟でみんなを守  
つてみせる

「ほら、みんな下がつて！私が全員相手してあげるよ 試獣召喚」

「朔夜だけじゃ勝てないよ。それに女の子一人を戦場で戦わせられ  
ない、Fクラス中堅部隊長吉井明久、試獣召喚」

「それを美波ちゃんの時に言えばよかつたのにわー」

「じひやじひや言ひじやない、Fクラスのくせに勝てると思つてゐ  
のか？」

「そんなこといつて負けたらかっこ悪いけど」

「先生、Dクラス笨鳥圭吾行きます！試獣召喚」

『Dクラス 笨鳥圭吾 VS Fクラス 関根朔夜&am

p・吉井明久

化学

99点

』

「・・・アキくん」

「正直悪かつたと思つてゐるよ」

9点つて……どうやつたら取れるのか教えて欲しいんだけど

「ま、まあ、朔夜がいればなんとか「頑張れアキくん」、私見てるから「やる気なし!?」

「無視してんじゃねえよ!」

おつ、今 笹島くんと戦つての最中だつたつけ、アキくんの点数が悪すぎて忘れちゃつたよ

「よし、アキくん。まかせたよ」

「無理だつてー!」の点数差みてよ、相手の10分の1しかないんだよー!」

仕方ないな……、また投げてみる?

「てこつー!」

片方のトンファーを取り、 笹島くんの召喚獣に向かつて投げつけたらサッとよけられた

「……つて、よけられたよ!」

「普通よけられるよ朔夜……」

なつ、だつてわつきの人普通に当たつてたよー?!

「仕方ない、僕が体勢を崩すからその間に武器とつてきてよ!」

「はいはい、了解あります!」

アキくんは観察処分者のため、呪喚獣のあつかいが慣れていて、いうが、さつきからすごい勢いでアキくんばかり攻撃されてるけ

ど、一発もあたつてないや

「そんな大振りで当たると思わないで・・・よつ！」

アキくんの召喚獣が 笹島くんの召喚獣の足に一発入れ、体勢を崩した  
その隙に私はトンファーを取りにいき 笹島くんの召喚獣に一撃を入  
れた

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 関根朔夜&amp;9点  
p.;吉井明久

化学 17点

』

「ちえ、流石にどじめはさせなかつたみたい・・・」

「まあ、朔夜の一撃であそこまで減らせたんだからよかつたよ」

「おい、 笹島一人じやきついだろう、他のやつらは数人にまかせて  
俺も手伝うよ」

「ああ、頼むよ中野」

よく見ると私たち以外の人たちも戦っていた。みんな戦死しなけれ  
ばいいんだけど

中野くんの召喚獣が現れ、頭上に49点と表示されていた

「戦死者は補習！」

どんどん部隊の数が減つていいく6人いたのも残り3人、そろそろや  
ばい。

私は中野くんの召喚獣の攻撃をトンファーで受け止めながらそう思  
つていると

「待たせたな、吉井に關根！五十嵐先生！Fクラス近藤吉宗が行き  
ます！試験召喚」  
サモン

そこへ援軍がようやく到着したようだ

敵の部隊長の塚本くんが撤退命令をだした、正直助かつたよ

「深いところへ潜り込むなよ。俺たちも明久の部隊を回収したら、田代のそ

こつちはFクラスの代表さんか・・・

ていうか、もつと早く援軍よこしてよね！」

「・・・『めんなさ』」

くつ、私が蹴らなければなんて理由を使われるとなにも言い返せない・・・

「とにかく立て直すぞ」

アキくんの部隊は一旦教室に戻り回復試験を受けることになった

教室に化学のテストを受け終わった後

「明久よくやつた」

坂本がすつごく晴れやかな笑顔でアキくんにそう言つていた

坂本があそこまで褒めるなんて、それもアキくんを、ビリゴリ風の吹き回しだらう。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッヂリな」

ああ・・・、アキくんの不幸を喜んでるわけだ、納得

「雄一、須川君が何処にいるか知らない？」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないかな？」

「やれる、僕なら殺せる・・・！」

「殺っちゃだめだからねアキくん」

「とめるんじゃない朔夜、僕はやつを殺るしかないんだ」

あらり、これは本気で殺るのかあ

「ちなみに、だが、あの放送を指示したのは俺だ」「シャアアアアアッ！」

おっ、どこから包丁取り出したんだい？それも避けにくい致命傷になじやすいうこうを的確に狙っているね

「あ、船越先生」

坂本がそういつた瞬間アキくんは田にも留まらぬ速さでロッカーの中に飛び込んだ

「さて、馬鹿は放つておいて、そろそろ決着をつけるか

「やうじやな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じやうつ

「・・・・（「ク」「ク）」

「おっしゃー！ロクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうひー。』

「みんな、アキくんの心配はしないんだね」

教室から皆が出て行く、テストを受けた直後で動きたくないけど私も行くとじょり

「あー、明久」

坂本が教室を出る前にアキくんを呼んだ

「船越先生が来たっていうのは嘘だ」

「おっ告げながら坂本が引きいるメンバーは外に出て行ったさて、私も戦場に出向こうかな」  
アキくんがロッカーからでてからすこに勢いで坂本を殺しにいったのは気のせいだよね

他のクラスが下校を始めたため、教師が捕まりやすくいたるところで戦いが始まっていた

「坂本」、坂本くん私がもうつていいよね」「ん？ああ、できるのであれば別にかまわない

代表を討ち取るのはみーちゃんの役目だから私は坂本くんで我慢しながら・・・

「じゃあ、坂本くん。私がその首をもうつよ 試験召喚」

「そう簡単に負けるかよ！試験召喚」

「試験召喚」

塙本くんの点数は107点と表示された、私の点数は・・・

「な、Fクラスでその点数だと！」

152点と表示されてた、しまった、とつすぐけやったかな・・・  
まあ、いいか

「ふふつ ぱいぱーい」

塙本くんの召喚獣をトンファーで一気に殴りつけた

「Dクラスの塙本くん、討ち取った！」

大きな声でそう報告すると、士気が一気にあがり始めた  
さて、みーちゃんが平賀くんだけ？Dクラスの代表を討ち取るの  
を見に行こうかな

「ちくしょう！あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「何を言つたと思えば、彼氏クン。いくら防御が薄く見えて、さ  
すがにFクラスの人間が近づいたら近衛部隊がが来るに決まつてい  
るだろ？ま、近衛部隊がいなくてもお前じや無理だろ？けど」

ていうか、Fクラスの扱いつて酷いんだな・・・  
といつも、平賀くんの対応は私でもムカつく！

「それは同感。確かに僕には無理だろ？ね。だから 姫路さん、  
よろしくね」

「は？」

『何をいってるんだ、この馬鹿は?』といつた顔をしている。  
そつか、みーちゃんがFクラスだつてことほしるはずがないもんね

「あ、あの・・・」

「え?あ、姫路さん。じつしたの?Aクラスはこの廊下は通らなか  
つたと思つけど」

「いえ、もうじやなくて・・・」

「みーちゃん、ファイト~」

「あ、さくやちゃん・・・、頑張ります。Fクラスの姫路瑞樹で  
す。えつと、よろしくお願ひします」

「あ、じがいじがい」

おつ、平賀くんが戸惑つてるかな?そりやAクラス確実の子がFク  
ラスにいるんだもんね

「その・・・Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「・・・はあ。どうも」

「あの、えつと・・・ひ、試験召喚です」

『Fクラス 姫路瑞樹 VS Dクラス 平賀源一  
現代国語 339点 129点』

おつ、流石みーちゃんだね、300点超えかあ~

「え?あ、あれ?」

「い、ごめんなさい」

その大剣に似合わず素早い動きで相手を切りつけた、平賀くんの反  
撃も許さず、一撃でDクラスの代表を下し、この戦争は決着がつい  
た

## 第七問（後書き）

ようやくロクラスとの戦争終了ですね・・・  
「意見や」感想をお待ちしております

## ムンロー（前編）

ロクラスとの試合戦争編が終わったので一息とこらかんとこらかんで朔夜が苗修羅と呼ばれる前の物話を書きたいと思います

「これは私……関根朔夜が昔、修羅と呼ばれる前の3年生くらいのときの話である。

「わ……私の筆箱……」

そう、私は昔から明るい子ではなく、おとなしく、口数の少ない子供だった

「筆箱？ああ、これの」とか？

「きたねえー筆箱だな、こんなのがみと同じだよな

「そうか、なら捨てちまおうぜ」

「や……やめて、返して」

私は抵抗するけど「うるせー！」と蹴られ殴られの毎日であった  
私は次第に学校に行くのがいやになっていた

私がいじめられる原因、それは、私の能力……絶対記憶能力のせいである。

絶対記憶能力、一度覚えたことは忘れない、忘れないと思ったことは忘れるができるという便利な能力だ だが、私はその能力のせいじめにあっていた。

父親はこの能力を誇らしげに思つてゐるらしく、親戚や近所、会社の同僚など至るところで私の能力の自慢をしている。娘がその能力のせいでいじめにあつてゐるとも知らずに・・・。

えつ？母親？お母さんは・・・とうの昔亡くなつてゐるの、そういうえばお母さんが亡くなつてからかな・・・私の能力が開花し始めたのわ

その日も私はいじめられていた、ただ、今日はいつもとは違つた

「や、やめてよ、それは大事な・・・大事なお母さんの形見・・・「お母さんの形見だつてよ、こんなものを学校にしてくるからいけないんだよ！」

その日は、お母さんの命日だった、命日だったからか私はその日、お母さんの形見の首飾りをして学校に言つたのが運の駄きだったのかもしれない・・・いや、首飾りをしていつたからこそ

私が首飾りを奪い取つた子はあるつことかその首飾りを踏みつけようとしていた、もう駄目だと涙がこぼれだしたとき、急にクラスの扉が開いた

「なにやつてゐるのー関根さんが泣いてるじゃないか！」

そこに入つてきたのはこのクラスのムードメイカーだった吉井明久くんだった

吉井君・・・、アキくんは私の首飾りを奪い返し、いじめてる子たちに

「なんでいじめるの！？関根さんがなにかやったのー！？」

「つむせえ！あいつの能力が気に入らないんだよ！」

「能力なんか関係ない！関根さんは関根さんだ！能力がうらやましいからってやつていいことと悪いことがあるー！」

初めてだった、初めて私を能力で判断しない、初めて私をかばってくれた、初めて私は私だなんて言われた

その言葉を聞いた瞬間さつきとは違う理由で涙が溢れ出してきた

「・・・まれ

「はつ？お前何いつてるんだ？」

「関根さんに謝れ！」

「ふざけてんじゃねえよー！」

アキくんはいじめっ子に殴られた、それでもアキくんは

「関根さんに謝れ！」

「つむせえなー！」

「や、もうやめてよーーーー！」

アキくんは殴られても殴られても立ち上がり同じ言葉を繰り返した、結局いじめっ子が気味悪がって帰つてしまひまでアキくんは同じ言葉を繰り返し言い続けてくれたのだ

「え、えっと・・・吉井君？だ、大丈夫・・・すこしい傷・・・

私が今にも泣き出しそうな顔をするとアキくんはこいつを見ていっつと笑った顔を見せ

「大丈夫だよ、関根さん」

口を切り、服などもぼろぼろになつたアキくんがそう言つてきた。  
・  
どう見ても大丈夫じゃなく、今にも倒れそうなアキくんの姿を見て  
私は強くなきやいけない・・・もう一度とアキくんがこんな  
姿をしないよ！」・・・と

それから私は空手、合氣道、総合格闘技などいろいろな分野を習い、  
おとなしく、口数の少なかつたのが嘘のように変わり、今みたいな  
明るい性格にまでなつた。

それもこれもアキくんがいなかつたら今の私がないことだ、だからアキくんには感謝を仕切れないほど感謝している、私たちはその日以来良く遊ぶようになり、次第にいじめはなくなつていった

そして今現在

「朔夜、どうしての？そんなものふけた顔をして？」  
「いやあ～、アキくんが私のことを助けてくれた日のことを思い出してね～」

「ふ～ん、そつか」

「そういえば、アキくん、クッキー焼いてきたけど食べる？」  
「わ～い、食べる食べる、朔夜が焼くクッキーおいしいんだよね」  
「そりゃどうも」

アキくんがおいしそうにクッキーを頬張る姿を見て私はクスッと笑つた

「アキくん、おいしい？」

「うん、とってもおいしいよ」

その笑顔は助けてくれた日の笑顔に良く似ていた・・・

「つて、私考えてみるとこいつぱに助けられてるんだなあ～」

「ん? どうこうこと?」

「いやあ～、アキくんにも助けられたし、秀吉くんにも・・・ねつ

」

「秀吉にも助けてもらつたことがあるの? いつこいつ、どんな風に?..」

「それはね・・・おっしゃない」

「なんだよそれー、待て朔夜、正直に話すんだ」

い～や～といいながら私はアキくんから逃げてゆく、それを追いかかるアキくん

クッキーでも置いとけばアキくんはつられるはず!

逆方向の道にクッキーを置いていくと「と隕にこなまり、違う道を進んでいった・・・つて単純すぎた

「秀吉くんに「アキくん・・・、私は絶対忘れないよ、助けてもらつた日のことは」

少し赤みのかかった夕暮れに誰にも聞こえないようにそりそりとやいた

## HANSON (後書き)

わたくして、グダグダだな（苦笑）

「意見 & まとめ」感想お待ちしております

## 第八問（前書き）

一週間ぶりくらいの投稿ですかね・・・  
テストの点数が悪くてpcを少しの間封じられてた（泣）

## 第八問

おはよー・・・つて、えつ?「

試召戦争の翌日、私は朝眠い目をこすって教室に入った・・・つてあれ?

ロクラスの設備に変わつてないんだけど・・・?

「坂本おおおお!――!」

「うおつ!待て、入つてくるなりドロップキックをかますな!」

ちつ、よけられたか・・・

「説明してもらおうか、なんでFクラスの設備のままなんだよおー・

「ん、お前にはまだ説明してなかつたけか?」

「ふうん・・・まあ、考えがあつてのことなら別にいいんだけど」

「実はな・・・つておい!いいのかよ!」

「その顔はなにか考えてのことだ、つと物語つてあるよおー!」

「まあ、話す手間が省けたからな・・・まあ、いいだひつ!」

まあ、Aクラスを倒すためには必要なんだろー

「おはよー」

「おう明久時間ギリギリだな」

「あつ、アキンくんおはよー、それと一時間目の数学のテストだけど監督の先生船越先生だつてわ」

「おはよー、朔・・・夜?今なんと?」

あれ?聞こえなかつたのかな?やつぱりバカなのかな?

「あつ、アキくんおはよー」

「違うよーその後！」

その後？ええーーつと・・・

「一時間目の数学のテストだけど監督の先生」「そう、その後が聞きたいんだよ！」

卷之三

「違うよー！ その前だつてー。」

す"ご"に冷や汗をかいてるねアキくん、それもそうだよね

「うん、冗談だよ」

「えつ？ よかつた～・・・、本当に監督の先生がふな「実は一時間田じやなくて一時間田なんだ」って、そいはどうでも良かったよ

「まあ・・・頑張つて生きてね・・・アキくん  
「イヤアアアアアアア！」

生存確率は五分五分と言つたところだよね・・・

「うあ・・・づかれだ・・・」

「はつ・・・また寝ちゃつた」

「・・・・朔夜は余裕だね」

「あつ、ヤバイ・・・、名前書いたつけかな?」

「また!?」

「またとは失礼な・・・まあ、一番大事なテストで名前書き忘れたけどさ・・・」

「うむ、疲れたのう」

「うつ・・・秀吉くんつて男の子だよね!?」

「私より可愛いじゃないかそのポニー テール・・・。」

「私も髪型変えようかな~」

「関根よ。おぬしはそのままの髪型が可愛いと思つた」

「うつ・・・?あ、ありがとう・・・」

「いいいい、今秀吉くんに可愛いって・・・//」

「よしツ昏[飯食い]に行くか!」

「あツウチも一緒していい?」

「じゃ僕は贅沢にソルトヴォーダーでも・・・」

「・・・ん?ちょっと待つて・・・、なんか忘れてるような・・・あつ!」

「ちょーっと待つたー!ー!」

「ん?どうかしたの朔夜?」

「こや・・・ほり、昨日の約束の・・・」

「ねむ、もしや弁当かの?」

「うん 迷惑じゃなかつたら食べる?」

「昨日みーちゃんが作るといつこ出す前に私が作るといついたから本當に作ってきたんだよね

「迷惑なもんか!ねッ雄ー! 朔夜の手料理なんといつぶつべつだ  
るー!」

「ああそうだな。ありがたー・・・が、毒をも盛つてないだらうな  
?」

「今からでも坂本だけ取り分けで持つて差し上げよつかな?」

「・・・・・・・・・。(ガンのくれ合)」

「せひ、おまらやめるのじや・・・せつかくのいじて走じやこ、いろ  
な教室ではなく屋上でも行くかの?」

秀吉くんがとあるなりせぬようかな・・・・・坂本のやつ・・・・・今  
度本當に盛つてきいやむ! -

「だつたらお前らは先に行つてくれ

「ん? 雄ーはどこか行くの?」

「飲み物でも買つてくる昨日の礼も兼ねてなー」

「おつ、坂本にしては気が利く~」

「お前の分は買つてこないがな」

「じゃあ、坂本の分の弁当は無しだねー」

「・・・・・・・・。(ガンのくれ合)」

「だからせひおまめのじやー!」

毒つてどうこう毒がいいだりつ・・・・・王水・・・・は薬品だしなあ~

「ちっ・・・まあいい。きちんと俺の分とつとおけよ  
「あのお・・・じゃあ私も手伝います。坂本くんだけじゃ持ちきれ  
ないでしょ、うー」

「おー、ありがとうな姫路」

みーちゃんと坂本が教室から出て行き飲み物を買いに行き、その間に私たちは屋上へと足を向けた

「屋上にて

「天気が良くてなによつじや」

「そうだねー」

空は雲が一切ない青空、まるでお弁当日和だった。

「人もいなくて貸切状態だし日差しと風が気持ちいいね

「つむ、そうじやのう」

「・・・・・・（口ク口ク）」

「あはは・・・あんまり自信ないんだけどね・・・」

といつて私はお弁当を取り出し重箱の蓋を取る

『おおーー。』

みんなが一斉に歓声を上げ始めた、中身は、から揚げ、エビフライ、シウマイ、厚焼き玉子、おにぎりなどなど、いろいろのものを入  
れてみたんだけど・・・。

「わい、戻し上がる。口に詮えぱいいんだけどね・・・、話つとくけど全部手作りだよ?」

「アーヴィングの死」

「わすか朔夜だよ！ どれか」のヒューライを・・・

「・・・・(パウチ)

卷之三

「あツ するいぞムツツリー 一ツ一

「どう? それ、あなた? あなたがいたあ

卷之二十一

最近お弁当なんか作つてなかつたから少し不安だつたんだよね・・・

「……じゃあ僕はこのから揚げを……」

わしも頂<sup>ハシ</sup>かの<sup>ハシ</sup>(ひよし)

あ、秀吉まで僕のかば揚げを！」

「これは絶品」やの」「

そ そ う お こ が と う

秀吉くんの口に合って良かつたよ

卷之三

「待たせたな！へ  
ぬそうじゃないか！どれどれ・・・（ひよ

（い）

「あッ雄一キサマー！」

「ん、どうした明久？」

「失礼な、私が全部作つたんだよつ！」

意外な物打たれ木打に一矢吐かし方紹介

「ん？ ありがとう」

坂本に褒められるなんてすごい変な気分だよ・・・

「わ、私もいただきます（ぱく）」

「ん、みーちゃんも帰つてきてたんだ～、ビーフ。」

「・・・す（じ）においしこです」

「せつ？よかつたあ～ 作つてきたかいがあつたよ～」

「・・・そうね、す（じ）くおいしいわ」

「美波にもせつ（じ）てもりえんと嬉しいこな～」

よかつたよかつた、ビーフやら好評で

「あのお、わくせつ（じ）やん。今度私にも料理を教えてもら（う）えませんか？」

「あ～、ウチにも教えて！」

「ん？別にいよいよ 今度家にでも遊びにおこでよ～、そのとき教えてあげる」

特にみーちゃんには教えておかないと・・・、死者が出るからね・・・。

「ねえ、そのとき僕も行つていい？」

「う～ん・・・、いいよ ビーフせ試食しに来たいんでしょ」

「あはは・・・ばれた？」

「ばればれだよ～」

まあ、みーちゃんもいることだしいろいろな意味でアキくんがいた  
ほうがいいかもしないしね～

「せつ（じ）えは雄一よ、次の目標なのじやが」

「ん？試合戦争のことか？」

見ればもう重箱いっぱいに作ってきたお弁当がなくなっていた  
・・・って、あれ？ 私食べてないんだけど・・・まつ、みんなに喜  
んでもらえたしつか

「相手はBクラスなのかのう？」

「ああ。 そうだ」

「どうしてBクラス？ 田標はたしかAクラスだつたよね？ まさか坂  
本が怖氣ついたなんてことはあるわけないし・・・」

「ああ、怖氣づいてはいな」・・・が、どんな作戦でも、うちの戦  
力じやAクラスには勝てやしない」

坂本らしくもないなあ、戦う前に降伏宣言だなんて・・・

「それじゃ、ウチらの最終田標はBクラスに変更つてこと？」

「いいや、そんなことはない。 Aクラスをやる」「  
「雄」、さつきと言つてることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないと思つ。だから一騎討ちに持ち込むつも  
りだ」

「一騎討ちかあ、当然Bクラスを使うから次の相手はBクラスつ  
てわけか」

なかなかいいアイデアを使うんだね坂本つてさすが元神童つて呼ば  
れたことはあるよね～

「え？ どういふこと？」

さすが現觀察処分者のアキくん、馬鹿だね～

「さすが朔夜だ、頭の回転が速くて助かる。さて明久、試合戦争で

下位クラスが負けた場合の設備がどうなるか知っているな?」「え? も、もちろん!」

アキくん絶対知らないよね、その顔わ・・・

(吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ)

さすがみーちゃん。分かってるし優しいね~教えてあげるだなんて

「設備のランクを落とされるんだよ」

「・・・まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

それはアキくんが常識がないと言つてるものだよ?

「では、上位クラスが負けた場合は?」

「悔しい」

「ムツツリーーー、ベンチ。それと朔夜は縄か紐をくれ

「・・・・・・(「クツ」)」

「ごめん坂本、鎖で我慢してくれる?」

「仕方がないな」

「待つて、僕をどうする気なの!?」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

「いいですかさずフォローに入るみーちゃんはやっぱ優しい子だな~

「つまり私たちのクラスに負けたクラスは最低な設備と交換されちゃうってことだよアキくん

「ああ。そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやつたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろ？」

やつぱり、ここまで考へてゐんだ坂本つて・・・。

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどね！」

よつするに、学年で一番手のクラスと戦つた後に休む暇なくまた戦争はきついからね。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろ？。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試合戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろ？。」ひびき姫路が「ると」ことは既に知れ渡つていることじやろ？。

やつぱり、私つて戦力として考えられてない！？

私も一応Aクラス確実と言われてたんだけどなあ！？

「そのへんにに関しては考えがある。しかも朔夜を使わないで・・・

だ。心配するな」

「私は大いに不満だよ・・・、秀吉くんに坂本には私は戦力扱いさ

れてないみたいだし」

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことせの後で教えてやる」

華麗に無視されましたよ私！！

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

そりやそうだ、坂本が行けばやられる心配はないだろうし、アキくんはDクラスで酷い目にあつてるもんね～

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」「ジャンケン?」

あれ？坂本が何も考えが無しでジャンケンなんていう三分の一の確立で負ける勝負なんてしないはずなんだけどな・・・

「OK。乗った」

「よし、負けた方が行く、で良いな？」

アキくんが坂本に「クリとうなずいて返した、それにしても坂本のやつにを考へてるんだろうか・・・？」

「ただのジャンケンでもつまらなーい、心理戦ありでこいつ

心理戦・・・あつ、なるほど。やつこいつとか

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ

「そうか、それなら俺は

」

私が考へてることが正しいなら……

「お前「アキくん」がグーを出さなかつたらブチ殺す」

「ちょっと……なにそれ!? それと朔夜、なんでもつてゐの……?」

「こんなことくらい大体予想がつくよ

「みく

やつぱりそういうことだよね。坂本が負ける可能性がある勝負をアキくんとやるのはずがないし

「行くぞ、ジャンケン」

「わああつ!」

パー(坂本) グー(アキくん)

「決まりだ。行つて来い」

「絶対に嫌だ!」

「アキくん、勝負に負けたんだから!」

「そうだぞ明久、それとロクラスの時みたいに殴られるのを心配しててるのか?」

「それもあるけど、僕の意図していた心理戦と違つてた!」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保障する。なぜなら、Bクラスは美

少年好きが多いらしい

「そつか。それなら確かに大丈夫だねつ

アキくんが美少年……いやいや、美少年ではないだろ

「でもお前不細工だしな……」

それもそれで酷いと思つたびに、不細工まではいかなないと私は思うけどなー

「失礼な！365度ビックリビックリ見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃないな」

「5度だけじゃ不細工じゃんアキくん」

「三人なんて嫌いだつ」

「とにかく、頼んだぞー！」

泣きながら屋上出て行くアキくんに坂本がそんなことを言つと、昼食はお開きとなり、再びテスト漬けの午後が始まった。まつ、寝てるから関係ないけどね

「こつとくが朔夜、ちゃんとBクラス並みの点数が取れてなかつたら秀吉に畠の通り名をばらすからな」「イエッサー、頑張りせてもらいますー！」

前言撤回、これは寝てる暇じゃないー！

## 第八問（後書き）

次からBクラス戦です  
一段落したら朔夜のプロフィールでも作りたいと思ってます！  
感想＆ご意見などお待ちしております！

## 第九問（前書き）

やつぱり毎日更新は難しいのかな・・・

## 第九問

「さて皆、総合科目「テスト」」苦労だった

教壇にたつた坂本が私たちの方を向いている。

午前中テスト漬けで正直めんどくさかったよ・・・。

「午後はBクラスとの試合戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か?」

『おおーっ!』

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ!』

「そこで、前線部隊は姫路に指揮を取つてもう。朔夜はその補佐として姫路を助けてやってくれ。野郎共、きつちり死んで来い!」

『が、頑張ります』

『まかせておいてよ』

『つおおーっ!』

指揮を取るのがみーちゃんだからか、さつきよりモチベーションがあがつたFクラスだった。

キーン!ーンカーン!ーン

昼休みが終了のチャイムが学校中に鳴り響く。いよいよBクラス戦

開始だ。

「よし、入つてこい！目指すはシステムディスクだ！」

『サー、イエッサー！』

皆が教室から全力でBクラスへと向かう廊下へ駆け出した、さて、私も行くとしようかな～ ゆっくりゆっくりみーちゃんと歩きながら前線へと出向き私たちが見た光景は・・・

『Bクラス	金田一裕子	VS	Fクラス	武藤啓太
数学	159点		69点	』

圧倒的な戦力差だった。

う～ん・・・、ここまで戦力差を見せられて士気がさがれても困るし・・・」

「Jは皆の士気を落とさないためにもみーちゃん、入ってきてもらえるかな？」  
「ふえ？ あつ、はい。」

とことこと前線に行つたみーちゃんの姿を見て、優しい子だと思つ。私は補佐としてついてきたのになんで私が指示してんだろうな・・・

「遅れました、ごめんなさい」

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

さすがみーちゃん、もう知れ渡つてるよね。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

「はい、わかつてます。さくやちやんに言われています」

「朔夜に？」

「そひ、私が指示したんだもん」

そひアキくんに寄りながらそひこつた。

「長谷川先生、Bクラス下律子です。Eクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

早速勝負を挑まれるみーちゃん、敵にとりては早めに倒しておきたいんだろうつけて

「律子、私も手伝う！」

え？ まさか一人がかりなんて予想してなかつたけど……問題ないよね

『サモン試獣召喚一』

掛け声と共に魔方陣が展開され、三対の召喚獣が召喚された。

「あれ？ 姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんとしてるんだね？」

「くつ？ アクセサリーって……ふ～ん、さすがはみーちゃんなんだね」

よく見るとみーちゃんの召喚獣だけにアクセサリーがつこつてあった

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

「？ 結構解けると、アクセサリーをしてこるの？」

やつぱりバカなんだね・・・アキくん、まあアキくんには無縁の話だけじゃ~

「そ、それって!?

「私たちで勝てるわけないじゃない!」

「じゃ、いきますね」

その言葉と同時に、みーちゃんの召喚獣の腕輪が敵の召喚獣に向かはれる

「ちょっと待つてよ!?

「律子!とにかく避けないと!」

大げさなほど大きく横に飛ぶ、まあ、待つてといつて待つ人はいいと思はんだよね

キュボツ!

「あやああーー!」

「り、律子!」

左腕から放たれた光線は、大きな音と共に敵の召喚獣を一体吹き消した。

と、そこでアキくんが私以外に聞こえないよつ小さな声で

「朔夜、なんで姫路さんの召喚獣だけアクセサリーをつけているの

?」

と聞いてきた。私はアキくんにみーちゃんの召喚獣を指さしながら

「いい？アキくん。テストの点数が400点以上とれると特殊能力がつくって教わらなかつた？」

『Fクラス	姫路瑞希	VS	Bクラス	若下律子&菊入
真由美				
数学	412点		189点	& 1
51点				

「ああ、すっかり僕には無縁の話だから忘れてたよ」

「ですよね」アキくんが400点以上とつたらそれはもはやアキくんじやないよね

「そこまで言づー？」

「だつて本当のことじやん」

アキくんが400点以上・・・ありえなすぎるからー

「い、若下と菊入が戦死したぞ！」

こんな話をしてる間にみーちゃんは菊入さんにも止めをさしていた。

「なつー！そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残りの人たちは驚愕の表情を隠せない、そりや そうどう、みーちゃん一人に一人が簡単に負けてしまつたのだからね

「み、皆さん、頑張つてくださいー！」

「やつたるでえーつー！」

「姫路さんサイゴーーー！」

みーちゃんの指揮官らしくない指示だけど、これは効果絶大だ。こんな可愛い子に頑張ってといわれちゃ頑張らない男子なんてそういうないと私は確信しているよー。

「みーちゃん、相手の士気も落としたことだし一旦下がってね」「あ、はい」

けど、みーちゃんが指揮官としてみーちゃんとした指示をとれそうにならんだけど・・・。

あつ、だから私が補佐ね・・・、坂本め、私を使おうだなんて百年早いんだよーーって言いたいところなんだけど、負けるわけにも以下ないし、ここは頑張ってみるかな

「中堅部隊に入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

そんな指示がBクラスから聞こえてきた、作戦通りだね

「明久、ワシたは教室に戻るぞ」「ん？ なんで？」

そこに秀吉くんが私たちに近づいてきてそうこうした、なんで戻る必要があるのだろう？

「Bクラスの代表じゃが・・・」

「うん」

「あのい根元らしい」

「根元つて、あの根元恭一ー？」

「うむ」

「私の大嫌いリストのナンバーワンを誇る人だね！」

「朔夜、それは知らないよ、たしかに僕も嫌いだけじゃ」

根元恭一とはとにかく評判の悪い男だ。噂ではカンニングの常連で、勝つためには手段を選ばない坂本よりも極悪非道な男だ。

「うーん、Bクラスの代表が根元だつたら戻つておいたほうがよさそうだよね」

「雄一に何かがあるとは思えんが、念の為にの」

「じゃあ、アキくん。こにはまかせてよ アキくんと秀吉くんは早くFクラスに戻つて」

「ありがとう朔夜」

「つむ、お主も戦死だけはするのじゃないぞ」

そういう残し、アキくんと秀吉くんは数人Fクラスの何人かを引き連れて一度教室に戻つていった。

本当は私が秀吉くんと一緒にいきたかったけど・・・ね

「さて、みーちゃん。絶対にBクラスの教室まで押し込むよ?」

「はい、さくやちゃん。頑張りましょ」

もう一度気合を入れなおし、私とみーちゃん率いる部隊は中堅部隊と入れ替わりながら後退している部隊を追うかのようにBクラスの教室へと進むのであった

## 第九問（後書き）

「」意見 & 「」感想お待ちしております

第十話（前書き）

明日休みだ〜

今現在私たち部隊はBクラスの教室のドアで交戦していた

「みーちゃん、少しつらいだらうけど」「で持ちこたえてね」「はっ・・・はい、が・・・頑張ります」

まずいな、ここまで来てみーちゃんの体力がなくなりつつある。みーちゃんの体は弱いため当然と言えば当然なんだけど・・・ここでみーちゃんに外れてもうひとつ一気に形勢逆転されるよね・・・

キーン!ーンカーン!ーン

「四時になりましたので今日の試合戦争は終了となります。続きは明日この状態から始まります」

急に教師フィールドがなくなり先生がそつと残し立ち去った

「えつ?どうこうことだろ?」  
「よ、よくわからぬけど、た・・・助かりました」  
「大丈夫みーちゃん?」

その場に座り込むみーちゃんに私は問いかけた

「うーん・・・、とりあえず坂本に聞かなくちゃいけないしFクラスに戻るつか?」  
「あ・・・はい、やくやちゃん」

私たちの部隊がFクラスに帰ろうと廊下を歩いているとそこには

「…………アキ（吉井）くん？」

そこには誰かに散々殴られた後に廊下に頭を叩きつけられたような怪我をしているアキくんがいた

「まつ、仕方ないな……この死体のような部隊長さんを運んで」  
『了解…』

流石に私一人じゃ運べないため部隊の男子に運ばせることにした、にしてもどうしたんだろう？

「坂本～、一応教室前に攻め込んだけどどういうこと？」  
「ん、よくやつたな。Bクラスと四時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。といつ協定を結んでな」「どうして？体力勝負な……そつか、みーちゃんが駄目なのか」「そういうことだ」

みーちゃんが主力なのだからみーちゃんの体力を考えて万全の体勢にするつてとこか……  
ただ、あの根元が何も考えずにそんな提案をしてくるなんて思えないんだよね……。

「…………」

一人でそんなことを考えているとアキくんが目を覚ました

「あつ、気が付いたアキくん？」

「心配しましたよ。吉井君ひでば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れているんですか」

「こぐら試合『戦争』じゃからこいつで、本当に怪我をする必要はないんじゃない？」

「こつか、普通はこんな怪我をしないはずなんだけど。」

「ううと色々あつてね。それで試合戦争はどうなったの？」

色々あると殴られ廊下に頭を叩きつけられるのか・・・

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応作戦通りに教室前までは攻め込んできたよ。」

「もつとも、こがりの被害も少なくはないがな」

坂本が被害を書いたメモを読み上げる。予想内の被害だけかなり大きい被害状況だ

「ハプニングはあったけど、今のところ順調でわけだね」

「まあな」

「・・・（トントン）」

「あ、マジシローーか。何か変わったことはあったか？」

いつのまにか坂本のそばに土屋くんがいた、そしこそばに土屋くんは今日情報係だつたつて

「ん？ Cクラスの様子が怪しいだと？」

「…………（「クリ」）

「漁夫の利を狙つつもりか。いやらしい連中だな」

「私たちが勝つなんてはなつから思つてないってことだね」「雄二、どうするの？」

「んー、そうだなー」

坂本は時計を見る。四時半。まだそんなに遅い時間でもない。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるが、とか言つて脅してやれば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ？」

「ん・・・、待てよ？ Bクラスは四時以降試召戦争に関しての行為を一切禁じるといつてきた・・・」

「よし。それじゃ今から入つてくれるか」

「そうだね」

そしてCクラスに怪しい動き、漁夫の利されるわけにもいかないから協定を結びにいく・・・

Cクラスの代表は・・・もしかしてつー？

「坂本 つてあれ？坂本たちわ？」

「うむ、お主が一人で考え事をしてある間にCクラスへ行つたのじや、万が一を考えてワシとお主はお留守番じや」

「なつー？あの馬鹿・・・、先走りすぎだよ」

「つむ？どういうことじや？」

「四時以降の試召戦争に関する行為を一切禁じるつて」とは協定も・

・坂本たちが危ない！」

「どうこことじや！？」

「Bクラスの代表の彼女がCクラスの代表なんだよ！」

「なんと…？」

つまり、私が考えるにCクラスに協定を結び行つたらBクラスの代表がいてこちらが先に協定をやぶつたからと言い坂本を倒しに来るに違いない…。

「…まつ、あのメンバーだしね、大丈夫でしょ」

私は信じてるよ…こんなところで討ち取られるはずないって

その数分後。坂本、みーちゃん、土屋くんが帰ってきた

「お疲れ様」

「朔夜、お前はこのことを分かっていたか？」

「あはは～、なんのことでしょう？」

「イエスかノーで答える」

「イエス」

「歯食いしばれ！」

ひどい、こんなか弱き女子に暴力を振るう氣なの！？

「ていうか、言う前に出てつたのはそっちでしょ！」

「まあ、そうだが」

案外すんなり認めたんだけど…、予想外だつた

「そういえば、アキくんわ？」

「ああ、明久と島田は今Bクラスと戦っている」

「それは大丈夫なのかのう？」

そりやそりや、なんせバカなアキ君だし・・・Bクラスとの点数差なんてひどいものだろう

「大丈夫だ、あのバカも、伊達に『観察処分者』なんて呼ばれてない」

数十分後、アキくんと美波ちゃんが帰ってきた

「あー、疲れたー」

「よ、吉井君！無事だつたんですね！」

「うん。このくらいなんといだつ！」

「ふんっ」

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも」

「（キツー）」

「あ。い、いや。美波」

「随分仲良くなつたんだね二人とも」

「え？コレで？」

前に比べて名前で呼び合つてるし、結構仲良くなつてると思つんだけど

「お。戻つたか。お疲れさん」

「無事じやつたようじやな」

「ん。ただいま」

秀吉くんと「坂本も」ひびきやつてきた

「さて、お前、」

「なに坂本？」

その場に残る全員を見回して坂本がこいつ告げた

「こいつなった以上このクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の後にこのクラス戦はきつい」

「そりやそりでしょ、向こいつは私たちのクラスより上のクラスなんだし」

「それならびひょうつか?」そのままじや勝つてもこのクラスの餌食だよ?」

「そうじやな・・・」

「心配するな」

「なにか策があるつて顔だね坂本」

「ああ。明日の朝に実行する。田には田を、だ」

どんな作戦かわからないけど、絶対に秀吉くんを使う作戦だらつ、だから秀吉くんをこのクラスに連れて行かなかつたんだと思つし・・・。

まあ、明日に期待して、今日は解散となつた

## 第十話（後書き）

「」意見 & 「」感想お待ちしております

## 第十一問（前書き）

正直にいの小説はみなさんにお読みているのだろうか・・・

## 第十一問

「昨日言つていた作戦を実行する」

試合戦争2日目、登校した私たちFクラスのメンバーに坂本は開口一番そう告げた

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

「アキくん馬鹿だね・・・、BクラスじゃなくてCクラスの方でしょ？」

「朔夜は頭の回転が速くて正直助かる」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉に『コイツを着てもいい』

そう言いながら坂本が取り出したものは・・・私たちの学校の女子の制服？

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじや？」

「秀吉くん、そこは構おつよ。それにしても坂本はなんでもそんなものを持つてるの？」

「企業秘密だ」

「なんだそれ！？」

企業秘密ひでなによ企業秘密ひでーこれは探るしかないね

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装つてもいい

ああ～、だから秀吉くんをCクラスに連れていかなかつたんだ  
木下優子とは、Aクラス所属の秀吉くんの双子のお姉さんである、

正直見分けがつかないんだけどね

「と、いつわけで秀吉。用意してくれ」

「つ、つむ・・・」

坂本から制服を受け取りその場で着替えを始める秀吉くん

「秀吉くん・・・、とつあえずここで着替えるんじゃなくしてどうかトイレとかで着替えてきてくれるかな?」

「つむ、たしかにね!「じゃな。」には女子もこな」とじゅーし

やめつまに残し秀吉くんは教室を出た

「朔夜!なんていとこつてくれるのやー。」

つと、よく見るとクラスの男子（坂本を除く）が私の方をじつとみていた  
やめうよ・・・照れるじゅん

「で、なにが?」

「だから、せつかく秀吉の生着替えが見れると思つたのにー。」

ああ、つまり女子みたいな外見の秀吉くんの生着替えが見たかったと

「じめん~

「絶対悪気ないだろー。」

当然そんなものあるはずがない!

『木下の生着替えをびりこしてくれるんだ』

『ふざけるな！』

『総員、攻撃態勢！女子だからとこつて手加無しだ！木下の生着替えを邪魔したやつは徹底的に痛い目にあわせてやれ！』

『『『おうーー』』』

「おい、やめておけ

そこに坂本が忠告をするのだが・・・

『総員、突撃――』

「ああー、喧嘩を挑んでくるとは・・・、地獄を見せてやる

「待たせたの、着替えてきたのじゃ・・・つべ、じつしたのじゃいつたい？」

着替えを終えた秀吉くんが戻ってきていきなりそんなことを言って出した

「見ての通り、皆睡眠不足で寝ちゃってるよ」

そこには、寝ている（？）Fクラスの男子生徒が「じゅ、じゅ」と転がっていた

「忠告を聞かないからだな・・・、まあいい。」Fクラスに行くぞ

「うむ」

「あつ、私もついていく」

「あ、僕も行くよ」

幸いなことに、みーちゃんや美波ちゃんがいなくてよかつたと思つ  
ちなみにアキくんは私の実力を知つてゐたため戦いには参加してこな  
かつた

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」  
「気が進まんのう・・・」

あまり乗り気ではない秀吉くん、そりやそうだ。実の姉のふりをして敵を騙すなんて決して気持ちの良いことではないだろう

「そこを何とか頼む」  
「むう・・・。仕方ないのう・・・」  
「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

秀吉くんは演劇部のホープにして声真似が得意というすこ子だ  
「はあ・・・。あまり期待はせんしてくれよ・・・」

ため息をつきながらクラスへと向かっていく秀吉くん

「雄一、秀吉は大丈夫なの?別の作戦を考えておいたほうが・・・」  
「多分大丈夫だろう」  
「すごい自信だね坂本?」  
「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

坂本が口に指を当てる。

ガラガラガラ、と秀吉くんがクラスの教室の扉を開ける音が聞こ  
えてきた

『静かにしなさい、この薄汚い豚どもー。』

・・・へつ？

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上はない挑発だね・・・」

「あれ・・・は、ゆうちゃんの真似をしてるんだよ・・・ね？」

ゆうちゃんってあんなキャラだつたけかな・・・？

『な、何よアンタ』

これはCクラスの代表、小山さんの声だらうか？

『話しかけないで！豚ぐさいわ！』

おいおい、自分から話しかけといて話しかけないでつて・・・

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数良いからつていい気になつてるんじゃないわよ！何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校舎にあるなんて我慢ならないの！貴方達なんて豚小屋で十分だわ！』

正直、Cクラスが臭くて醜い教室が同じ校舎について言つのならロクラスはどんな罵倒をされるんだろう・・・

『なつー！言つに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですつて！？』

小山さんにとってはFクラスの設備は豚小屋とイコールなんだね・・

『手が穢れてしまつから本当は嫌なんだけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送つてあげよつかと思つの』

負けてもDクラス設備にしかならないけどね

『ちょうど試合戦争の準備もしてゐようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるからー。』

そういうクラスに言い残し秀吉くんは教室を出てきた

「これで良かつたかのう?」

「どうかわつぱりした顔で秀吉くんが私たゞこ近寄つてくる

「ああ。素晴らしい仕事だつた  
「ゆうぢゃんつてそんなこと言つような子だつたけ?  
「関根は姉上のことを知つてあるのかのう?」  
「あつ、うん。去年一緒にクラスだつたし」

そういうえば翔子ちゃんとも一緒にクラスだつたから私つて存在が忘  
れられてるのかな?

『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始め  
るわよー。』

『クラスから小山さんのヒステリックな叫びが聞こえてきた

「作戦もつまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始める

ぞ

「あ、うん」

「やついえ、私が寝かせて（？）あげたあの子達は起きてるかな

？」

「・・・じつだらうな

えつ、そこまで強くやつてないはずだから起きると困りますだけど  
な・・・

そんなことを考えつつ、後十分で始まるBクラス戦の準備をするため私たちは急ぎ足でFクラスに戻つていった。

・・・起きていますよ、起

第十一問（後書き）

「意見」「感想などお待ちしております

第十一問（前書き）

久しぶりの更新だね

・

・

## 第十一問

「ドアと壁をうまく使うんじゃー戦線を拡大させぬでないぞー」

只今Bクラス戦開始から少しあつたBクラスの教室前  
坂本の作戦『敵を教室内に閉じ込めろ』を実行している真っ最中な  
んだけど・・・

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行えー！」

本来はみーちゃんが総司令官として指示をだすはずなんだけど、今  
日は様子がおかしい  
みーちゃんが、一向に指示を出そつとしない・・・どうしたんだろう  
うー。

「左側出入口、押し戻されていますー！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼むー！」

古典とこつと竹中先生だよね、Bクラスは文系が多いって聞いている  
し・・・

「姫路さん、左側に援護をー！」

アキくんからみーちゃんへ援護要請がくるのだが・・・

「あ、そ、そのつ・・・ー！」

肝心なみーちゃんが泣きそうな顔をしてオロオロしてこる

「アキくん……つて竹中先生に言つたわ！」

「朔夜？……了解！」

アキくんが竹中先生に近づいて耳元で一言

「……ジラ、すれますよ」

「つーー少々席を外します！」

頭を押されて走り去つた竹中先生、まさかこんなところで役に立つなんて

「ありがとう朔夜、正直危なかつたよ」

「いえいえ、勝つためだからね それにしても……」

「あつ、やっぱり朔夜も思つた？姫路さんの様子がおかしいよね？」

やつぱりアキくんも気づいていたみたいだ……、それにしてもどうじけつたんだるう？

「姫路さん、どうかしたの？」

アキくんがみーちゃんに近づき歸ねた。たしかに様子がおかしいし、原因がわからないことには身動きがとれないからね、どうじけつたんだろうか？

「そ、その、なんでもないですっ」

「そつは見えないよ。何かあつたなら話してくれないかな。それ次第で作戦も大きく変わるだうし」

「ほ、本当になんでもないんです！」

首を大きく横にふるみーちゃん、泣きそつな顔は相変わらず、絶対

なにがある・・・

「右側出入口、教科が現国に変更されました！」

なつ、たしか右側出入口はたしか数学だつたはず！？

「数学の教師はどうしたの！？」

「Bクラス内に拉致された模様！」

右側までBクラスの得意な文系にされるなんて・・・

「私が行きます！」

みーちゃんが戦線に加わろうと顎(あご)に手をついた瞬間

「あ・・・」

急に戦線へ向かおうとしていた足が止まってしまった。

何かをみて動けなくなつた感じがしたんだけど、なにをみたんだろう、そう思いみーちゃんが見た方向を見てみるとその先には窓際で腕を組んでこちらを見下す卑怯者　根元の姿があつた。

ここからでは少し見えにくいんだが、手には確かに封筒をもつていた・・・、それもあるの封筒は・・・。

「・・・なるほどね、さすが根元つていつたところだよ」

昨日の協定はおかしいと思つたんだ、自分が不利になる協定なんて根元がするはずないとつたんだけど、昨日教室を荒らしたときにつつけた・・・ってどこかな。みーちゃんを封じじることができる物を

「姫路さん」

「は、はい・・・・?」

アキくんがみーちゃんを呼び

「具合が悪そだからあまり戦線には加わらないよ」。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「・・・・・はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ・・・・・!」

なるほど、アキくんに見られて誤解されたってみーちゃんが言つてた、アキくんも気がついたってことか

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

「やつぱり気がついてたんだね、アキくん」

「朔夜?どうして?」

「あの封筒あげたのは私だからね・・・、根元潰すぞ」

異様な雰囲気をまとい始めた私にアキくんがビクッと反応した、いつものアキくんならここで黙つたり距離をとるのだが今日は、一步も引かずに一喝

「当然だつ!」

「「クラス」

「「雄一(坂本)つ!」

「うん? どうした明久と朔夜。脱走か? チョキでシバぐぞ」

「話があるんだ」

「……とつあえず、聞いづか」

坂本のジロークにかまつてゐる暇はない、坂本もそれを察したのか真面目な顔つきになつた

「根元君の着てゐる制服が欲しいんだ」

「……お前になにがあつたんだ?」

やつぱり馬鹿だねアキくんつて……、それじゃ男に趣味がある人みたいじゃん

「私に面白い考えがあるんだ」

「……まう。まあいいだう。勝利の曉にはそれくらなんとかしてやる」

「うん、楽しみにしてよ」

あいつを「」の学園で過ごせないよつにしてやるひじょんか……

「で、それだけか?」

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は?」

「理由は言えない」

これはアキくんがみーちゃんが坂本にラブレターを書いてると思つてゐるらしく、本当はアキくんあてなんだけど……私が口にするもじやないと思つ

「どうしても外さないとダメなのか?」

「うん。 どうしても」

坂本が顎に手を当てて考へる、やうや Bクラスに勝つにはみーちゃんが必要だからね

「頼む、雄二ー！」

「私からもお願ひ、さかも・・・いや、代表ー！」

「・・・条件がある」

「条件？」

「一体どんな条件を言つてくるんだねー？」

「姫路が担う予定だつた役割をお前がやるんだ。どうやつてもいい。必ず成功させる」

「もちろんやつてみせるー。絶対に成功させむたー。」

「良い返事だ」

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計りつて根元に攻撃を仕掛けろ。科目はなんでもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入口は今の状態のままだ」

「・・・ずいぶんと難しいことをアキくんに頼むんだね」

Bクラス教室の出入口が今の状態だと、それこそみーちゃんみたいに圧倒的な個人の火力が必要になるためみーちゃんはこの作戦の要なんだけど、それをみーちゃんなしで・・・。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させろ」

」の口ぶりからして失敗したら敗北・・・って感じかな

「それじゃ、うまくやれよ」

「え? どこが行くの?」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

Dクラス? ・・・ああ、そういえば、教室の設備を交換せずに作戦に役立てるとか言ってたな~

「明久」

教室をでる直前に坂本は足を止め、アキくんに

「確かに点数は低いが、秀吉やムツツリーのようだ、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「・・・雄一」

「うまくやれ。計画に変更はない」

そう言い残し、坂本は教室を後にした

「あつ、ちょっと待つた」

私も教室から出て坂本を追った

「ん? どうした朔夜?」

まだ近くにいてよかつたよかつた、すぐに追いついた

「あのいこひじゅ、私には秀でている部分がないって聞こえるんだけど?」

「そんなことか？お前は本気出さないしな」

「……そのことなんだけど、今回私は本気を出す」

「つー？本当ににがあつたんだ？」

「言えないっていつてるでしょ！」

いや、別に言つてもいい氣がするけどアキくんが頑張つてるし私も頑張りたいからで……

「……いいだろ、どうせ翔子とかはお前の実力を知つてるだろう」

「うん ありがとう坂本」

「礼はいらない。お前が本気を出してくれるのならこちらが有利になるだけだ、頑張れよ」

そついい残し坂本はロクラスへと出向いていた  
私が教室に戻るとアキくんたちはもういない

「あれ、アキくんたちはどうこいつたの？」

そいつらの男子に尋ねると

「ああ、あいつらならロクラスに行つたぞ？」

ロクラス……なるほどねえ……アキくんにしかできない大役なわけだ

「さて、科田は……、英語かな。アキくんなら遠藤先生を使つはず」

遠藤先生は少しのことは寛容で見逃してくれるしね

「さて・・・、補給補給つとー」

久しぶりにこんな頑張ろうと思つたよ・・・

「せ・・・関根?・・・手が見えないほど早く動いてるぞ?」

さあ、パーティーを始めようじゃないか!ーー

## 第十一問（後書き）

久々の更新だ  
最近パソコンをいじってなかつたからね  
感想などお待ちしております

## 第十二回

現在、三時になる10分ほど前

「おっ、アキくんたちみつけ～」

「あっ、朔夜、どうしてここに?」

「いいじゃん、私も見たいなと思つて～」

ロクラスにいるアキくんたちと合流した私は今から始まる作戦を見届けることにした

「一人とも、本当にやるんですか?」

「はい。もちろんです」

「」のバカとは一度決着をつけなきゃいけなかつたんです

今から戦いを始めるのはアキくんと美波ちゃんだ

「でも、それならロクラスでやらなくとも良いくんじゃないですか?」

「先生、それは無理ですよ?アキくんは『観察処分者』ですから、Fクラスみたいなオンボロ教室じゃ教室がアレ以上にひどい状況に変わっちゃいます」

「もう一度考え方では

「いえ。やります。彼女には田頃の礼をしないと気が済みません」

何度も考え直すように説得する遠藤先生に、有無を言わせぬ口調で言い切るアキくん

「わかりました。お互いを知る為に喧嘩をするところのもの

教育としては重要かもしませんね」

そうこうと遠藤先生は一人から距離を取つて教師フィールドを張る

「「試験召喚つーー」」

おなじみの小さな召喚獣が魔方陣から現れる、美波ちゃんはサーべルかな？アキくんは・・・木刀つと

「行けつーー」

殴りつとアキくんの召喚獣が美波ちゃんの召喚獣に向かつて走り出す

「ぐうつーー」

しかし、簡単に美波ちゃんに避けられ壁に拳をぶつけるアキくんの召喚獣、そのフィールドバックで拳を傷めるアキくんがいた

「んのうつーー」

大きなモーションから一撃を美波ちゃんの召喚獣に放つ。

「つう・・・つーー」

横に飛ばれてかわされ、さつきと同じように壁にぶつかった

「アキ、時間がないわよ」

美波ちゃんの言つとおり現在時刻午後一時五十七分。作戦まであと三分までせまつてきていた

『お前らしい加減諦めろよね。昨日から教室の出入口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

遠くからあのBクラス代表の根元の声が聞こえてきた

『どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

このムカつく挑発をする聞きなれた声は坂本の声、みーちゃんが戦闘に加われないため、坂本が率いる本隊までも出動させないといけない状況になってしまったんだろう

「うあつ！」

アキくんに学習能力がないかのような大振りの攻撃は美波ちゃんには当たらない。

『はア？ギブアップするのはそつちだろ？..』

『無用な心配だな』

『そつか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？..』

『・・・お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくぞ』

『けつ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

「はああつ！」

四度目の攻撃、これも華麗によけられた。

何度も何度も壁に拳をぶつけているせいで拳から血が出始めている

『……さつきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやっているのか?』

『さあな。人望のないお前に対して嫌がうせじやないのか?』

『けつ。言つてみ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せー。』

『……体勢を立て直す! 一回下がるぞー!』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか!』

「アキ、そろそろよ」

「アキくん、早くーもう午後一時五十九分ー」

「うん。わかつてゐよ」

アキくんが目配せし、他の皆は黙つてうなづく。

「吉井君、島田さん。二人とも何をしようとしているのですか?」

まだ状況を飲み込めていない遠藤先生はアキくんと美波ちゃんを交互に見る。

「おおおおおー。」

アキくんの召喚獣がこれまでの攻撃より大きく力をいれ、大きく拳を振りかぶる

『あとは任せたぞ、明久』

敵の本隊を引き付けた坂本が、壁の向こう側からよへ通る声でそう告げた。

現在の時刻、午後三時ジャスト。作戦開始！

「だああーーっしゃあーーっ！」

アキくんの召喚獣がもてる力をすべて注ぎ込んで壁に攻撃する。ハナつから田的是Bクラスにつながる壁なのだ。美波ちゃんとの勝負はアキくんが壁を破壊する召喚獣を呼び出す為の方便に過ぎないというわけ

「 ぐうう！」

アキくんがこれまでにないなり声を上げた、拳の先は先ほどまでよりもひどい出欠をしていた・・・が

「アキくん・・・、よく頑張ったね」

ドゴォッ

豪快な音をたて、Bクラスにつながる道が生まれた瞬間だった。

「ンなつ！？」

崩れ去つた壁の向こうに驚いて引きつった根元の汚い顔がある。

向こうの戦力のほとんどが坂本を討ち取るためにで計らつてゐる、根元の守備は薄いということは・・・またとないチャンスだよ！

「くたばれ、根元恭一一一！」

私たちは呆気に取られてゐる根元に勝負を挑むために駆け寄つた。

「遠藤先生！Fクラス島田が

「Bクラス山本が受けます！試験召喚！」

「くつ！近衛部隊か！」

まだ教室に残つていた根元の近衛部隊がその行く手をふさいできた

「は、ははっ！驚かせやがつて！残念だつたな！お前らの紀州は失敗だ！」

失敗？なんのことをいつてるのだ？この代表は？

「みんな下がつてて？Fクラス関根朔夜が行きます！試験召喚！」

私の召喚獣が山本さんの召喚獣をなぎ払う

「戦死者は補習！」

そこに鉄人が現れ山本さんは鉄人によつてつれてかれた

「は、はっ？」

そう一撃でなぎ払つたといふことだ・・・。

ダン、ダンッ！

突如現れた生徒と教師、一人分の着地音が響き渡る。エアコンが止まつた涼を求む為に開けた窓からロープを使って飛び込んできた保険体育教師と土屋くん・・・だがつ！

「土屋くん・・・」これは私がもりりつよ  
「・・・（コクシ）」

土屋くんには悪いけどここには譲つてもらうよ、なんせ今の私は・・・

「Fクラス、関根朔夜、Bクラス根元恭一に英語勝負を挑みます」

『Fクラス	関根朔夜	VS	Bクラス	根元恭一
英語	683点		189点	』

「大事な親友の心をもて遊びやがつて、腹がたつてるんだよつ！！」

一気に根元の召喚獣との距離を詰め、トンファーで殴りつけた

「み、認めないぞ、お、俺がFクラスなんかにいーー！」

今ここにBクラス戦が終結した

## 第十二問（後書き）

遠藤先生って英語Wのかよく分からないので英語で  
ひとつとう本氣を出した朔夜の点数、高橋女史に匹敵する強さ！？  
ご感想などお待ちしております

#### 第十四問（前書き）

ひどいよね・・・。  
テストの結果が悪かつたからってPC一ヶ月禁止なんてえー（↙  
こ

## 第十四問

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といへか。な、負け組代表？」

「…………」

床に座り込んでいる根元。やつらまでの強気が嘘のよつことなしすぎる

「わい、朔夜。ここからはお前がやるんだらいい。」

坂本がこちらを向いてそういうてきた。  
そういうえば任せとかいつちやつたつけ。

「了解、楽しく調理してみせるから」

私は一步前にでて根元を見下す田でにらみつける

「本来ならさ、設備を明け渡してもうつて素敵なFクラスの卓袱台をプレゼントフォローするになんだけどさ、条件によっては特別に免除してあげてもいいんだけどなあー」

Fクラスの面々がざわめき始めた。

そりやそうだ、せつかく勝つてBクラスの設備が手に入るのにそれをやめると云つてるんだからね。

「落ち着け、皆。前にも云つたが、俺たちの田標はAクラスだ。こ

こが「ゴールじゃない」

つと「」で坂本が弁明してくれた

「うむ。確かにのう」

「そういうこと、だからBクラスが条件を呑めば開放してあげようかなって」

「・・・一つ聞いていいか」

「黙れ下衆が！！てめえに拒否権はないんだよつ！！」

「・・・（おーい朔夜、昔の顔と口調にもどりてるぞ）」

「・・・つロホン。と、とりあえず、そういうことなのー。」

うう・・・なんかみーちゃんのこととかでムカついてたら昔みたくなっちゃつた・・・。

「・・・条件はなんだ」

抵抗する力なく根元が私に問う

「それは根元。あなただよ？」

「俺、だと？」

「うん。正直去年からつざかつたし、今回の戦争でひどいことをしてくれちゃつたりしたもんね〜・・・。」

私はそういうながら根元をむりにらみつけると根元は気迫に負けたのだろうかそっぽを向いてしまったあれ？私ってそんなに怖いのかな？

「つと、いうことでBクラスの皆さんに特別チャンスを」「えましょう」

坂本にアイコンタクトを送つて用意を急がせてつと・・・

「Aクラスに試合戦争の準備ができるいると宣言してくれるかな。そうすれば設備については見逃してあげてもいいよ。ただし、宣戦布告じゃないからね? あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えてね~」

「・・・それだけでいいのか?」

疑うような根元の視線。

・・・って、視線をこっちに向けるな、気持ち悪いから!

「うん。Bクラスの代表がコレを着てさつきこつた通りに行動してくれたら見逃してあげる」

そつこつ坂本に用意を急がせた女子の制服。

「ば、馬鹿なことを言つないの俺がふざけたことを・・・」

根元が慌てふためく。そりや嫌だらうけど・・・。

実際に楽しい光景だよね・・・、はつ、また私は昔みたいに。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよ!』

『任せて! 必ずやらせるから!』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな!』

Bクラスの仲間たちからの温かい声援が飛び交つた。

根元つてここまで嫌われてたんだね・・・、まつ、どうでもいいけど。

「んじゃ、決定だよね」

「くつーよ、寄るな！変体くふうー！」

「とりあえず黙らせました」

「あ、ありがと」

まさか一瞬にして代表の鳩尾にクリーンヒットを叩き込むなんて流石だよ。

「じゃあ、着付けに移るとしようかあー、アキくん、手伝ってくれるかな？」

「了解」

ぐつたりと倒れている根元に近付き制服を脱がせる・・・もちろんアキくんが。

私？私はこんな変態を触りたくないからね

「う、うう・・・」  
「もう一発つと」

うめき声が聞こえたので今度が私が深く鳩尾に素早くいれでおきました

「これをお先に次がコレで

アキくんに順序を教えつつ根元を着付けていく。

「・・・可愛くないー！」

着付けし終わった瞬間に私がつぶやいた一言である。

「うさ。 おなかこまで可愛くないとわね・・・」

「えじや、坂本、後のことは頼んだよ?」

「おひ、まかせておけ」

坂本とFクラスの数人は根元が逃げ出さないようにAクラス近くまで連行していった。

「わひと・・・」

私は一人で廊下にて根元の制服をあらる。

「・・・おひ、みつけみつけ」

見覚えしかない封筒を取り出し、制服を三箱に詰めて私のシラシラ達成

さて、これをアキくんに・・・ひと、いたいた

「アキくんアキくん、はい」

「・・・ん? これは・・・姫路さんの手紙?」

「そう。 アキくんが返しといてね」

「え、えつ! なんで僕が? 朔夜が返しておけばいいじゃないか」

むひ・・・昔とかわらず鈍感なんだよねアキくんつて。

「いいから、恥ずかしかつたらみーちゃんの鞄の中に入れておいてあげて」

「うーん・・・、わかつたよ」

そういう残すとアキくんはFクラスに向かい走り出した。

えつと、次はみーちゃんつと・・・

「みーちゃん」

「ふえーーー、さくやちゃん。もう、こきなりだつたからビックリ  
しちやつたじゃないですか」

「あははは・・・『めん』『めん』。それよつと、あの手紙かやんとア  
キくんに渡したの?」

「えつ?・・・それが、その・・・、根元君に・・・」

「そういうえば、根元も私があげたよつな封筒もつてたんだよね~」

「・・・さくやちゃん?」

「たしかそれは根元の制服に入つてたよつな『氣』があるんだよね~」

わざといじつへ口にさる

「さくやちゃん・・・、それであんなことをして取り返してくれた  
んですね?」

「なんのこと?私はただアキくんがなにかに氣がついてやる氣にな  
つてたから手伝つてあげただけだから」

「えつ?・・・?吉井君ですか?」

「そういうえば、さつき封筒をもつたアキくんが教室に戻るとこをみ  
たんだよね~」

「・・・ありがと、さくやちゃん」

そういう残すとみーちゃんはFクラスの教室へと向かつた。

ふああ~、眠い・・・。私はもうやる」ともやつたし帰つても大丈  
夫かな?

てか帰る。帰つて早く寝よう。なんか疲れたしね・・・。

・・・・ト校しよつとした時に廊下から

『二、この服、ヤケにスカートが短いぞ！』

『いいからキリキリ歩け』

『さ、坂本、それに関根！よくも俺にこんなことを

』

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間が無いんだぞ！』

『き、聞いてないぞ！』

あの会話は笑いを耐えるのに必死だったよ。

#### 第十四問（後書き）

ええつと、久しぶりすぎる更新ですかね、はい。

久しぶりすぎて前の書き方と変わつてたりしないでしょうか（汗  
自分じや気づかなくてすみませんm（ーー）m

ご感想&アドバイス意見などいろいろとお待ちしております

閑話 修羅と悪鬼羅刹と運命の人（前書き）

なんかBクラス戦も終わったことですし、そうだ！京都へ行こう的なノリで閑話を書いてみました

「ひ、秀吉くん、ちょっといいかな？」

「うむ、なんじや関根？」

「えっと、できれば関根じやなくて名前で呼んでもらいたいなん  
て……じゃなくてつーはー」「」

「これは……お先生かの……」

「クリだよ」

それもそこじゃのう、それはしても急はとひしたのじゃ。」

「べ、別に！！」

中学校一年生

当時の私は  
・・・荒れてた?  
?

より学校の友達が増えたのが一番の喜びだつた

・・・けど、それも良くなき思はない男子つて結構いてさ、女なのに自

分達より喧嘩が強いのか嫌だったらしい

レノンの歌詞集

やり返して泣かせてやつたりしていた。

それが効いたのか私へのいじめはいつの間にかなくなっていた・・・

いや、私へのいじめはなくなつたけどなくなつていなかつた。  
けそいつらは私には勝てないと思つたんだろうね、・・・今度はア

キくんをいじめていた。

理由は簡単、私と一番仲が良くて、私の大切な友達だから。  
私が嫌いなのに私に勝てないから、一番仲が良い友達を傷つけた。  
アキくんはそれを否定してたけどね、私はいじめられてるところを  
目撃視しちゃつたんだよね。

あいつらは本当に最低だつた。だから私はそいつらを殴つた。もう  
フルボツコだよね。

・・・それが暴力事件として扱われた。私が殴つた奴が先生にばら  
したんだって。

先生に「私はこいつらに殴られたり物を奪われたりなどいじめを受  
けてたんですよ・・・」と言つても無駄だつた。私だけが一ヶ月の謹  
慎を受けた。

理由は、「こんな優秀な生徒がいじめをするわけない」だつてさ。  
たしかに勉強なんてしないで授業中は寝てすごしてるとよりかは成  
績優秀の授業をまじめに受けてる子のほうを信用するんだろうけど  
さ・・・。

謹慎開け、私は前と変わつてしまつた。

「おはよう、朔夜。ようやく謹慎が解けたんだね」  
「・・・ん？ああ・・・アキくんか・・・」  
「ど、どうしたの朔夜？」  
「・・・悪いけど私にかまわないでくれる？」  
「えつ・・・ま、待つて朔夜！」  
「・・・うつとうじいんだよ」  
「つ・・・」

殴った。自分でもすぐ後悔した・・・がこれで良いと思つた。

こうして一番の仲の良かつた友達を突き放した。

これが中一の夏の出来事

ここから非行少女？

学校には行かないで喧嘩ばかりしてた。

裏の世界で「修羅の朔夜」と呼ばれるほど荒れに荒れていた。

中一の夏、あいつに出会ったのはこのときだ。

私はいつものように学校をサボり、狭い通りに居座つていた  
ここに狭い通りは非行に走つてゐやつや、暴力団などにはいつてゐ  
やつらが多く通る。だから私はここにいる。

なんでかつて？そりやもちろんここにいれば喧嘩がいつでもできる  
からね。

そんなある日一人の男がやつてきた。

「おい、邪魔だ。どけよ」

「ん？へえ・・・これはこれは、悪鬼羅刹さんがどういったご用  
件で？」

そこに立つていたのは悪鬼羅刹と謳われこの地域で一番恐れられて  
いた男が立つていた。

「ほう、悪鬼羅刹と知つても退く氣はないよつだな」

「はつ、ここは私の縄張りだよ？退くわけないじやんよ」

「・・・泣いても知らないぞ」

「はつ！逆に泣かせてやるよーーー」

「・・・（ガンのくれ合ご）」

「一つだけ聞いておく、おまえの名わ？」

「悪鬼羅刹なんかに教える通り名はないけどね……一応「修羅」って呼ばれるよつ！」

「つして喧嘩は始まつた、激しい攻防戦が繰り広げられた。

・・・が、まあ、結果は勝てるはずないよね。

私は女子で相手は男子、体格差や力、身長差その他もろもろ勝てるわけがない、それもこの地域で一番恐れられているほどの実力者をもつやつなんかに挑むなんてさ。

私の武器のスピードすらあいつには見切られていた。

「けつ、まあ、たいしたもんだつた。じゃあな

私は始めて敗北を味わつた。それも田立つ外傷が無いよつて顔などは殴らずに戦つていた。それが一番悔しかつた。

それから私はもつともとと強くなるよつと考えた。

これが中一の夏

そして中二の夏。

またいつものように過ぐす毎日であつたがこの日は違つていた。

そう、8月31日、中学校最後の夏休み、この日、私は自分を変えたいと初めて考えるよつになつた。

「よつ、まだここに居座つてるんだな」

後ろからしたその声は去年私に初の敗北を味わわせた男による声だつた

「悪鬼羅刹か・・・、どうした?またここを通りたいなら私を倒してから行きなよ」

「はあ？ まだこりてねえのかよ」

「ふん、去年の私と思つたら大間違いだからねー。去年の恨み返をせてもらひつよ」

「つー？ あぶねえじやねーか！」

「ちつ、避けるのかよ、去年より早くなつてゐはすなんだけどな」「だひうな、きりかわせた・・・つて感じだつたからなー。」

悪鬼羅刹も本氣になつたらしく密赦なく殴りかかつて来た。  
バキッ！

私はこの瞬間、「あつ、どつかの骨が逝つたな」と感じた、が、ここで退いたら去年と同じ思いをすると思つたんだらうね。

「せつやどひも、お褒めの言葉をあつがどひつー。」

ドスツー！

「つ・・・・・」

完璧に鳩尾をとられた感触があつた。

「・・・かつたあやるよひになつたみたこじやねーかつー。」

「せつやどひもーー。」

「ひつて殴り合はせ続いた。

ふと氣がつくと病院にいた。

「・・・悪鬼羅刹ーー。」

飛び起きた部屋を見渡すと悪鬼羅刹の姿は何処にもいないが、可愛らしい少女がいた。

「よつやく起きたよつじやのつ」

「いは・・・? てか、悪鬼羅刹はどうしたー?」

「むう? おぬしは路上で倒れているところをワシが見つけて酷い怪我をしておったのでのう、病院に連れてきたのじや。骨が何本か折れてたらしいのじやが、命に別状はないらしいぞい」

この可愛らしい少女は一体なんなんだろう? はつ・・・つん。そつか。

「そつか・・・私、天国に来たんだね

「なぜそつなるのじや! ?」

「だつて田の前に男子の制服を着た美少女がみえるなんて・・・

「ワシは男じや! !」

・・・へつ? 男?

「えつ・・・とお、男の娘?」

「男の娘ではないのじや! ! ワシはただ外見が女子に見えるだけでのつ・・・」

「くすり、やつぱり男の娘じやん」

「・・・よつやく笑つてくれたのつ」

笑顔でそつ返してきた

「・・・あつ」

笑うのなんていつぶりだろう……。最近の私は喧嘩ばかりして笑うことなんかなかつた……。

昔はアキくんのおかげで明るくなつていつつも笑つてたのにな……、アキくん……。

あ、あれ? どうしてだろう、自分から突き放したはずなのに、なんで涙がでてくるんだろう……。

「ど、どうしたのじゃ……。ワシはまずこことをこつてしまつたかのう……?」

あたふたし始めた男の娘を見て無理にでも笑おうとし

「……ぐすん、ははっ、な、なんでもないよ。ただ笑うのなんて久しぶりだなと思つてさ」  
「なにがあつたのかのう?」

この娘の心配そうな顔をみたらなぜだか無意識に話していた。もちろん学校名とか人物名はふせてたけどね。

「……そうじゃつたのか。大変じゃつたのう」  
「あう……や、やめてよ、頭なんか撫でないで……」  
「おぬしはよく一人で頑張つているのう」  
「うう……私はただ喧嘩しているだけだよ……。き、聞いたこと無い? 修羅の朔夜つて、それが私なんだ」

「ど、せみんなど同じでひいたり、怯えたりするだらうと思つた……

「む? おぬしが修羅かのう、知つておるぞ、悪鬼羅刹の次にやばい

と言われている女子があるとな。」

「つ・・・・・そつか、じゃあ、どうして・・・? みんなは修羅つて聞くだけで怯えたりひいたりする・・・。ビ�して君は怯えたりもひいたりもしないんだよ!」

みんなは通り名だけで怯えるし、私の姿をただけで避けていく、なのに・・・なのにビ�して・・・ビ�して・・・

「どうして怯えないといけないのじゃ? ビ�してひかないといけないのじゃ?」

「だつ、だつてそれは!」

「修羅じゃからか? じゃがワシは怯えもしないしひきもせん。じゃから苦しむのはやめるのじゃ、一番の仲がよかつた男の子を突き放しておぬしは悲しいんじゃ るつ?」

「や、そりだけど・・・いまさら・・・

「弱気になつてどうするのじゃ? おぬしは昔みたいに明るくいたいのじゃ るつ? 本当は昔みたく笑つていたいのじゃ るつ?」

「や、そんなこと・・・」

「今のおぬしの顔はとても毎日がつまらなそうな顔をしておるが、わつきの笑顔は本当に楽しそうに笑つておつた

「うつ・・・そんなことこつても・・・またその男の子がいじめられたりしたら私・・・」

「じゃからもう喧嘩などやめるのじゃ、喧嘩などをこつまでも続けていたらその可愛い顔が血無になつてしまつぞ!」

その一言で私は涙が溢れ出した、非行に走つて初めて優しくされた、初めて心配してくれた、初めて・・・可愛いなんていわれた・・・。

「ど、どうしたのじゃ! またワシは変なことを!?」

「ち、違う違う・・・。違うから・・・。」

「だ、大丈夫かのう？」

男の娘は私に近寄つて顔を覗き込んできた

私は男の娘の腕の中で泣きまくつた。

・・・気づくと私は車の中にいた

「やつと起きたわね朔夜。」

「あなたが病院にいるなんて電話がくるからとんでもきたのよ」

「ああ、朔夜を運んできてくれた子ね？私もお礼をしたかったんだ  
けど帰っちゃつたらしいのよ、それと朔夜にその子からの伝言、  
頑張るのじや」「だつてさ」

つ・・・一また涙がこみ上げてきた。

自分で変えて、ここまで変わった姿をいつかみせてみたいと思つた。

「…お母さん」

「…………明日から学校ちゃんと行へよ」

「ちゃんと勉強もする・・・自分で変えてみたいんだ」

「・・・頑張んなさい」

「うん！」

「うして車の中でゆれながら深い眠りに落ちた。」

一学期初日

私はまた避けられるんじゃないかと学校に行きたくなかったのだが昨日の男の娘の言葉を思い出し、勇気を出して学校へと向かった。

久しぶりの学校、久しぶりの校庭、久しぶりの教室、久しぶりにドアを開いた

「お・・・おはよう」

みんなの視線が一気にこちらを向いた、中には私を前にいじめていた子や昔友達だった子、それにアキくんもいたみんなの視線を感じながらも自分の席へと座る

そこである生徒たちが

『なんでおまえみたいなのが学校きてんだよー』

『そうだよー修羅がつ！』

『うちはおまえみたいなのがくる場所じゃねえー。』

などとひどい罵倒がとんできた、そりやそうだ。私はここ2年間まともに学校にも来ず、ましてや修羅などと呼ばれていた非行処女だからね

『やめんなよアーニーリー』

それは昔一番の仲良しだつた主の声だった

「あ・・・アキくん・・・?」

「久しぶりだね朔夜……、元気にしてた?」

え？？？あの・・・と どうして・・・？私はアキくんのことを殴り飛ばしたんだよ・・・？こんなもう友達でもない私なん

かかはで

「あ……アキちゃん……」

「ちょ、ちょつと朔夜！？抱きつかないでよ、苦しい、苦しいから」

「アーリーはこのめんね  
ジーラーの三日月

「……………」

# 泣き止んでよ朔夜あ

卷之三

それからというもの、勉強を頑張り、明るい性格にもどつた私は友達が増えていった。いじめも心配するほどではなく、私もアキくんもいじめられることはなく中学校を卒業できた。

こうして私はいいや、裏の世界の修羅の朔夜を封じ、楽しい学校生活を送ることができた、あの子によつて・・・。

「いや、病院でのお返しをしてないからね」

むかし呪はむけでいたなしのはむかし

「い、いいの！秀吉くんのおかげでアキくんとも仲直りできたしね」「もう……、あの男の子は明久じゃったのか？」

「うん、そうだよ。それにしてもあのどきの秀吉くんはかっこよか

つたのにな~」

「む~あ~あのときわ~?」

「こまじやあ、私より可愛~いじゃん」

「む~・・・ワシなんかよりも~と可愛~いぞい朔夜」

「・・・ふえ!~?今なんて?声が小さすぎて聞こえなかつた

「も~もつ言わな~いのじや~!」

「じ~じじじよ~--む~一回、む~一回だけ~」

「うう～ん・・・出来がいまいちかな？」

とりあえず、次からは本編に戻ります

ご感想 & a m p; 意見ありましたらお待ちしております

第十五問（前書き）

ふわあ～・・・

皆様、お正月いかがお過ごしでしたか？  
私は・・・、寝てましたつ（テヘツ

## 第十五問

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している」「

壇上の坂本がいつもと違う。素直に礼を言うなんて・・・まさかっ！？」

「Fクラスの男子、戦闘態勢に入れ！あれば坂本じゃない、坂本に化けた偽者だつ！」

『『『イエッサー』』』

「おい待て、なぜ朔夜の号令で戦闘態勢に入るんだつ！？」

「甘かつたね！化ける相手を間違えたお前の負けだつ！総員、右手にカッター、左手に上履きを持ったね！？」

『『『イエッサー』』』

「・・・よし、ならば総員突撃ーー！」

「ま、待て俺は本物の坂本雄二だ！」

本当の坂本だつて・・・？

「・・・ならその証明を、貴様の幼馴染わ？」

「・・・霧島翔子だ」

「よし、本物だね（ニヤツ）」

「おい、なぜいまニヤツとわらつ『総員突撃ーーーー！』なぜだつ！」

？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「朔夜、これが狙いかつ！？」

Fクラスの男子生徒の意見は言葉がなくても満場一致していた。クラスの団結つて本当に素晴らしいと私は思つよ。

「遺言はそれだけか？・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

「あまいよ、アキくん。まことにこの手錠で手と足を拘束し、この紐で宙にぶらさげ、みんなの怒りの鉄拳を繰り出したあとに靴下は使うものだよ？」

「流石です総長」

やばい、楽しい、楽しすぎるこれさて、坂本はどんな悲鳴をあげるのだろうか

「あの、吉井君」

そこにでゅつくりとま一ちゃんが口を開いた

「ん？ なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりや、まあ。美人だし」

あつ、アキくん、その答えはまざい気が・・・

「・・・・・」

「え？ 何で姫持參は僕に向かって攻撃態勢を取るのー？ それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしてるのー？」

「・・・えつ？ アキくんわからないの？ そつかー、それはねえー、アキく・・・すう・・・・・」

いきなり朔夜がしゃべってる最中に倒れこむよつて寝てるんだけど！？

「えつ？ いきなり朔夜が寝ちゃったんだけど…？ それと姫路さん…？ そのハンカチはなに？」

「まったくさくやちゃんたら、あれほど早く寝ないといけませんつていったのに…。」

「いや、だからそのハンカチ…。」

「さくやちゃんは寝くなつちやつただけです」

「だから、そのハンカチさくやちゃんは寝くなつちやつただけです…。そ、そつか」

「まあまあ。落ち着くのじや歯の衆」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。流石冷静だ…。が、ちらちら朔夜のほうを心配そうな目でみている

「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じやぞ？ 男である雄一に興味があるとは思えんじやうが」

・・・おお、そう言えば。

「むしろ、興味があるとすれば…。」

「・・・やうだね」

僕らの視線が一人に集中する

「な、なんですか？ もしかして私、何かしました？」

「・・・すう、すう・・・」

慌てる姫路さん。頬はなにもしてないよ。強いて言えば朔夜になにをしたんだろう

「とにかく、ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけやるんだ！」

『おおーっ！』

『せうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになつている。そんな気がした・・・

「すうすう・・・」

一人を除いてだけどね。てか、朔夜はいつまで寝てるんだろう？

「皆ありがとう。そして残るはAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

先日の昼食時に聞いた話だったので僕は驚かなかつたけど、クラスの皆はかなり驚いたようで、教室中にざわめきが広がつた。

『どういひことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄一がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせた。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「ええ！？ 私じゃないの！？」

「うわっ！？ おはよう朔夜、急にビーフしたの？」

「いや・・・なんか薬を盛られたような・・・うん。気のせいだよね」

「ああ・・・うん。大丈夫ならいいんだけど」

「で、坂本、なんで私じゃないの！？ 私なら絶対勝てるって知つていつてるー？」

私はこれでも坂本より、Aクラス代表のじょうぢゅんよりも頭がいい自信はある。

「そりだよ雄一。馬鹿な雄一が勝てるわけなああつー？」

そう口に出たアキくんの頬をカッターがかすめる。完全に殺す気だつたね。

いや、あれでも一応友達だよね、まさか本気なわけがないよね！

「次は耳だ」

前言撤回、あれはアキくんのことを友達だと思つていない。

「まあ、明久の言つとおり足しかに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしない」

「いや、だから私を使えば勝てるんじゃー！？」

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだつただろ？ まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかつた」

「ねえ！？ ものすごい無視だよねー！？」

「・・・はあ。まともにぶつかって絶対勝てる確率なんて100%じゃないだろ?」これから具体的なやり方を説明してやる・・・  
騎打ちはフィールドを限定するつもりだ

まあ、私だっていつも勉強してないし、調子が悪かったらしちゃんに負けるかもしないけど・・・、ていつか、坂本は絶対勝てる秘策があるわけだね!

「フィールド? 何の教科でやるつもりじゃ?」

「日本史だ」

日本史? しじゅうちゃんが不得意だつて聞いたこともないし、坂本が得意だつてことも聞いたこともないんだけど?

「ただし、内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

あれ? その条件だと、満点が前提だから一問でもミスしたほうが負けってこと?

「でも、同点だつたら、やつと延長戦だよ? そつなつたら問題のレベルもあげられちゃうだろ?」  
「ブランクのある雄一には厳しくない?」

「確かに明久の言つとおりじゃ」

確かにアキくんの言つてることは正しいよね、けど、なにも作戦がないままあの坂本が叫び出すなんてないと想つ

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ? こくらなんでも、そこまで運に頼り切つたやり方を作戦などと言つものか」

「？？それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」  
「いいやアキくん、しょうちゃんなら集中しなくつたって小学生程度のテストなら何の問題もないよ・・・坂本、もつたいぶつてないでそろそろタネ明かしてもいいんじゃないかな？」

クラスの皆も私の言葉につなづく

「ああ、すまない。つい前置きが長くなつた」

かぶりを振つて、坂本は改めて口を開いた

「俺がこのやり方を採つた理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知つていてるからだ」

ある問題・・・なんのことだろ？

「その問題は『大化の改心』」

「大化の改心？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題ででてくるかな？」

「いや、そんな掘り下げた問題じやない。もつと単純だ」「単純」というと 何年に起きた、とかかのう？」

「おつ。bingoだ秀吉。お前の言つ通り、その年号を問う問題がでたら、俺たちの勝ちだ」

大化の改心・・・？そんな基礎の問題をあのしょうちゃんが間違えるかな？

「大化の改心が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

いや、それはどうかな・・・? アキくんなら間違えるよきっと

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

へえ、やっぱり元神童だけあるよね。

「雄一よ。それこそ関根にやつてもらつた方が確実ではないのかのう？」

「？？どういう意味じゃ？」

大の苦手なんだよ、なあ朔夜？」

な、なななんんで知つてるの！？

私が苦手な教科がなんであれ一にはれぢや二でゐる!!?

問題だ、  
朔夜。  
鎌倉幕府ができる年号はいくつだ？」

か、鎌倉幕府？えつとえつと・・・、鎌倉幕府はたしか・・・

行ハ! 奴(1582年)は鎌倉幕府!

「えい、やつはの!!?

・・・ねえ、みんなそんな可愛いつな子を見るよつた田で見ないでよ  
なんか私がバカみたいじゃん!!

だから今、学年トップにいる。しかし、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ、俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は「『システムデスクだ！』

## 第十五問（後書き）

「感想&アドバイス」意見お待ちしております

## 第十六問

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

### 恒例の宣戦布告

今回は残念ながら（？）アキくん一人ではなくFクラスの代表である坂本を筆頭に、みーちゃん、アキくん、秀吉くんに土屋くんと私、Fクラスの首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

「うーん、何が狙いなの？」

現在坂本と交渉のテーブルについているのは秀吉くんの双子の姉であるゆうちゃん。まさか秀吉くんの姉だつたなんて・・・、通りで顔が似てるよね！

最初に、あれ？どうかでみたことがあるような・・・。と思つたわけだ

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

ゆうちゃんが訝しむのも無理はないよね。下位クラスに位置する私らが、一騎打ちで学年トップのしうちゃんに挑むこと自体が不自然なのだからね。当然何か裏があると考えられるもんね。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返事が返ってきた。ここからが坂本の交渉の本番だ。

「とにかく、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった?」

坂本が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけど、それだけだったよ? 何の問題もなし」

秀吉くんの挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。その勝負は半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあつ氣はあるか?」

「Bクラスって・・・、昨日来ていたあの・・・」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね?」

試召戦争の決まりの一つで、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。これは負けたクラスがすぐさま再選を申し込んで、試召戦争が泥沼化しない為の取り決めなんだよね

「知っているだろ? 実情はどうあれ、対外的にあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約にはなんの問題もない。・・・Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

この作戦は設備を入れ替えたからこそできる方法だよね

「・・・それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

・・・なんだか坂本が根元みたいな悪い顔してゐる。

まあ、この交渉 자체が悪役だもんね～・・・。

「うーん・・・わかつたよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「え？ 本当？」

意外な返事だつたようでアキくんが驚きの声が上がつた

「だつてあんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・」

あつ、あのゆづりやんが肩を震わせてるよ、どんだけ気持ち悪かつたんだか・・・、ちなみに私はすぐ帰つたから見てないんだよね～

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじやなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝つた方の勝ち、つていうのなら受けてもいいよ」

「う・・・」

さすがゆづりやんだけ、ちゃんと警戒してきている

「なるほど。」ひちから姫路が出てくる可能性を警戒していいるんだな？」

「えつ？ 坂本そつなのー？」

「うん。多分大丈夫だと思つけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だつたら、問題しだいでは万が一があるかもしねないし」

「 ゆうひやんまでー？」

そこまで私の実力を知ってる人がいないなんて・・・

「 あつ、『ごめん』ごめん朔夜、いたんだ？」

「 ひどいよつー!?」

「 安心してくれ。うちからは俺が出る」

「 無視されたつー!?」

「 うわあーん・・・、みんななんか大嫌いだあーーー！」

「 無理だよ。その言葉は鵜呑みにはできないよ」

「 これは競争じゃなくて戦争だからね、と付け足す。その通りだけど・

・みんな私の扱い方ひどくないー!?

「 そりか。それなら、その条件を呑んでも良い」

「 へつ・・・、どうせみーちゃんと土屋くんと坂本で二勝でしょ、私なんかいらぬいんだもんねー！」

「 ホント? 嬉しいな」

「 けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンドはあつてもいいはずだ」

「 え? うーん・・・」

またも悩むゆうひやん。クラスを代表としての交渉だからね。この会話で△クラスの全員の立場が変わる可能性がある。慎重になるにこしたことないからね

「・・・受けてもいい

「うわー。」

い、いつのまにー?」

「・・・雄一の提案を受けてもこー」

「あれ? 代表。いいの?」

「・・・その代わり、条件がある」

「条件?」

「・・・うそ」

うなずいて、ショウチャさんは坂本を見た後にみーちゃんを踏みするかのめりじゅうと観察した。そして、坂本に向けて

「・・・負けたら向でも一つ皿ひじとを聞くへ

ああ・・・、ショウチャさんのやつたことじが手に取るよひわかる

「しょうちやーん、みんながこじめるよー」

「・・・あー、朔夜。Aクラスにこなにと黙つたらトククラスにいたの?」

「うん、名前書かれてるやつ

「・・・せつか。よしよし」

あー・・・、せっぱつしょうちやんは優しくな

なんでしょうちやんはアレのことが・・・

後ろからシャッター音とにかが噴出する音、百合がみえるなんて声が聞こえたのは氣のせいだよね・・・、てか、氣のせいだと思いたい

「じゃ、いつよつ・勝負内容は五つのうちをいかに決めかねて。」  
あざむ。「つけで決められた。」

そこでやつやんが妥協案をだしてきた。まあ、良い感じに交渉が進んだんじやない？

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に…まだ姫路さんと朔夜が了承してないじやないか…」

？？

アキくんはなにを言つてゐんだろ？

「心配するな。絶対に姫路に迷惑はかけない…、まあ、朔夜はどうだつてこゝか？」

「…（しつつ）」

「雄二、流石にいつかと思つた」

秀吉くん…、優しいな

「…・勝負はいつ？」

「やうだな。十時からでいいか？」

「…・わかった」

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「やうだね。既に報告しなくちゃいけないからね」

交渉を終え、Aクラスをあとにする。

私たちの戦争の終結は、すぐそこまで迫つていた。

・・・ ここがみんなで、私の扱いはどうこと思わない・・・?  
?

## 第十六問（後書き）

ご意見 & ご感想お待ちしております

## 第十七問（前書き）

この小説を読んでくれてる人がいるのか最近不安になつてきました  
・・・ 読んでる人いるよね？

## 第十七問

では、両名準備は良いですか?「

今日の戦争は、ここ数日でかなり戦争でお世話になつてゐるAクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を勤める。

「ああ」

「・・・問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス、まあ、Fクラスじや最後の戦い、みた  
いなかんじじやないからね

それと激しい戦いになつたらFクラスの置が抜ける気がする

「それでは一人目の方、どうぞ」

「ワタシから行くよ」

向ひうは秀吉くんの姉であるゆうひちゃん。  
対するひひは、

「ワシがやうひ」

その弟の秀吉くんだ

・・・がつ、なんかいやな予感がする

「とにかく、秀吉」

「なんじや?姉上」

「ヒクラスの小山さんつて知つてゐる?」

「はて、誰じや?」

・・・あれ、このクラスつて」とはもしかして秀吉くんが

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとひたちに来てくれる?」

「うふ? ワシを廊下に連れ出しちばつあるのじゃ姉上?」

ゆうちゃんのフリをして罵倒しまくった相手のよつくな・・・

。

『姉上、勝負はどうしてワシの腕を掴む?』

『アンタ、このクラスで何してくれたのかしら? どうしてアタシがこのクラスの人たちを膝呼ばわりしていることになつていいのかなあ?』

『はつはつは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して

あ、姉上つ! ちがつ・・・! その間接はそっちには曲がらなつ・

・・!』

ガラガラガラ

扉を開けてゆうちゃんだけが戻つてきた

「秀吉は急用ができたから帰るつてさつ。代わりの人を出してくれる?」

にこやかに笑いながらポケットから出したハンカチで返り血を拭うゆうちゃん、あんた実の弟になにをしたんだよ!?

「い、いや・・・。そうだ、さく「秀吉くんの看病行つてくるねつ

!・」・・・つておいで!」

「・・・どうせ私なんかいなくても勝てるんでしょ? 信じてるよ

「…

そつづぶやいてAクラスから飛び出した。

Aクラスから少し離れたところに散々間接をはずされたつまに、「みのよに捨てられている秀吉くんの姿があった。  
は、はやく保健室へ…」

むつ・・・ここは何処じゃ?」

「あつ、良かつた、ようやく起きたんだね秀吉くん」「関根よ・・・、ここは何処じゃ?」

「ここは保健室だよ? Aクラスのそばで捨てられるよおいてあつた秀吉くんをここまで運んできたんだよ」「そうじやつたか・・・すまぬのつ」

なんかこの感じ・・・あの時みたいだな・・・

「ねえ、秀吉くん?」

「なんじや?」

「あの時みたいだね?」

「・・・そうじやのつ」

秀吉くんも覚えててくれたみたいだ。  
なんだかものすいへうれしい

「・・・あの時秀吉くんに助けてもらつてなかつたらいい私はいなかつたと思つよ」

「大袈裟じやの「」

「ううん、大袈裟なんかじゃないよ、本物の「」とだから」

あの時私は秀吉くんに会つていなかつたらいいのにいなで薄暗い路地裏などに腰座つてゐると思つ

「私があの時秀吉くんに会つていなかつたら友達としゃべつたり、笑うことも泣くこともなかつたと思う。本当に感謝してゐよ」

「う・・・・・、それは良かつたのじや」

「ん? どうかしたの秀吉くん? 顔が赤いよ? もしかして熱とか?」

私は秀吉くんのおでこに手をくつつけ自分の額にも手をくつつけ熱を測つてみた

「うへん・・・・、熱はないと思ひナビ・・・・、つて秀吉くん! ?」

わざと真つ赤に染まつてゐんですけど! ?

「だ、大丈夫じや。そ、それより、今戦争状況はどうなつてゐんじや?」

「あつ、うん。やうそろ坂本としょうつかやんが戦つはずだよ?」「やうかのう、では、ワシらも見に行くとしよつ」

「大丈夫なの?」

「大丈夫じや、ほれ、見に行くのじや」

「ふえへ! そ・・・つて待つてよ、歩くの早よー」

一体秀吉くさんはどうしたんだろ? う

・・・うん、とつあえずうかうの勝利を好みにいきますか



第十七問（後書き）

ご意見&amp;ご感想など待っています

ガラガラガラ

私たちがAクラスの中に入ると高橋先生がパソコンを閉じて「ちらに向かってきていた。

「アキくん、これはうちのクラスが一勝したってことだよね？それとも負けたから高橋先生は出でていっちゃったのかな？」

まあ、負けたってことはないだろ？、少しAクラスが騒がしいし

「あつ、朔夜それに秀吉も。姫路さんとムツツリーにが勝利したよこれから大将戦が始まるところかな」

ああ～、やっぱり予想通りの展開だね

「秀吉は大丈夫なの？」

「うむ。もう大丈夫じゃ」

「そつか、よかつた」

やつぱりアキくんは優しいんだな・・・つと改めて実感・・・。

・・・つて、坂本とかがひどいだけか、アキくんの反応が一般的だよね

「おう、お前ら帰つてきてたのか」

「今ちょうどね。やっぱり私の考えた通りに進んでるね、これで坂本が勝てばすべてがうまくいく・・・つてことだよね？」

「ああ、お前が秀吉の看病にいかずに姉に勝利すればよかつたのだがな」

「あれれ？ それは私の考えとまた別の考えだね？ どうせ私なんかですつもりなんかないんでしょう？ 最後は自分で勝つて世の中学力がすべてじゃないって証明するんだと思ってたんだけど？ わたしが一勝なんかしちゃつたらAクラス並の人物が一勝もした、だから運悪く負けたんだ……、つてなるんじゃない？」

坂本が苦虫を噛み締めたような顔をしている……、ははあーん、団星だな？

「雄一、あとは任せたよ」

そこにタイミングがいいのか悪いのかアキくんが坂本に握手を求めた

「ああ。任せられた」  
「……（ビック）」  
「（フツ）」

今度は土屋くんが坂本に歩み寄り、ピースサインを向ける

「お前の力には随分助けられた。感謝している

「（フツ）」

土屋くんは口の端を軽く持ち上げ、元いた場所に戻った

「坂本君、のこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ

「はいっ」

アキくんのこと？ 坂本は何を言つたんだらうへ後で聞いてみるか・・

・みーちゃんに

「では。最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

Aクラスに戻ってきた高橋先生が両名のクラス代表に声をかける

「・・・はい」

短く返事をし、教室を出るしょーひーちゃん

「じゃ、行つてくるかな」

「坂本君、どうして私だけを避けて教室を後にしようとしてるんだろうね？」

「それだな、その・・・あれだ」

私の顔をみると悔しそうな顔をしていた、よっぽど自分の考えていたことが見透かされて悔しいんだろうか？

「まつ、坂本が勝てばすべて丸く収まるからね・・・、頑張りなよ？」

「・・・ああ、当然だ！」

坂本はハイタッチを交わしAクラスの教室を後にし最終決戦の地へ向かつた

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』

私達はAクラスの壁にあるディスプレイで視聴覚室の様子が伺える

画面の向こうでは日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

『不正行為は即失格になります。いいですね?』

『・・・はい』

『わかつてゐる』

『では、始めてください』

二人の手によつて問題用紙が表にされる・・・ついに始まつた!

「吉井君、いよいよですね・・・!」

「そうだね。いよいよだね」

「これで、あの問題がでなかつたら坂本君は・・・」

「あきらかに集中力や注意力に劣る以上は、延長戦で坂本が負けるだろうね」

「じゃが、もし出でおつたら」

そう、もし出でいたら私達の勝利だ

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される出でるのか、出でないのか・・・?

『次の( )に正しい年号を記入しなさい』

( )年 平城京に遷都

( )年 平安京に遷都

流石は小学生レベル・・・

いや、私は分からぬけどさ、わかりそうな感じがするこれくらいなら出でるかな・・・!

( ) 年 鎌倉幕府設立

( ) 年 大化の改新

「あ・・・！」

「もしかして・・・！」

そこにはあの問題が・・・出ていた

「よ、吉井君！」

「うん」

「もしかしてこれで私たちつ！！」

「うむ！これでワシらの卓袱台が

『システムデスクに！』

揃いに揃つたFクラスみんなの言葉

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『つおおおおつ！』

教室を揺るがすような歓喜の声。

そりやそりや、これでみんな卓袱台とお別れできるんだから！

そしてテストが終了し、結果が『ディスプレイ』に表示された

『日本史勝負 限定テスト 100点満点』

『Aクラス 霧島翔子 97点』

VS

『Fクラス 坂本雄一 53点』

・・・うん、たしかに卓袱台とはお別れできただよ。  
だけど、それはもつと悲惨なみかん箱になっちゃったじゃん！

## 第十八問（後書き）

ご意見 & amara 感想などお待ちしております

## 第十九問

「三対一でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ私達に対する高橋先生の締めの台詞だった。うん、先生に言われなくともわかつてますよー私らの負けってことくらーー

「・・・雄一、私の勝ち」

床に膝をつく坂本にじょじちやんが歩み寄る

「・・・殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「上等だ！なにかっこつけながらでていったわりに53点ついて！」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーつ！」

やつぱりこいつあほだつた！

こんなやつに任せるとじやなかつたーつー！

「アキ、落ち着きなさいーアンタだつたり30点も取れないでしょ

うが！」

「それについては否定しないー！」

「さくやちやんも落ち着いてください、わくやちやんだつて30点も取れないじやないですか」

「なつ！？違うよみーちやん！私は10点も取れないよー！」

「血腫する」とじやあつませんつー！

「くっ…なぜ止めるんだ姫路さんに美波ー！」の馬鹿には喉笛を引き裂くといつ体罰が必要なのに…」

「アキくん、そんなんじゃねるこよー少しづついたぶつてあげなき

や  
」

「それって体罰じゃなくて処刑ですか…」

「やめるのじや 関根よ…」

アキくんはみーちゃんに、私は秀吉くんに身体を張つて必死に止められた。

ちつ。秀吉くんとみーちゃんの優しさに救われたか

「…でも危なかつた。雄二が所詮小学生の問題だと油断していなければ負けていた」

「言訳はしねえ」

・・・・・

「やつぱり私達Fクラスの怒りを納めるためにくたばれ坂本…！」

「落ち着くのじや 関根、よしよし、良じ子良い子じや」

「あう…やつ、そんない」としたつて・・・はふう・・・

秀吉くんに頭を撫でられ活動停止

べ、別に頭がぼーっとしたわけじゃないんだからねつ…

た、たまもう少し撫でられて・・・つてなんでもないーつ…

「・・・といひで、約束」

あつ、やつこえれば負けたほうがなんでも言つてとを聞くつて約束したんだつけ？

「わかつてゐる。何でも言へ」

### 潔い坂本の返事

「……それじゃ」

えつと・・・、録音機録音機つと・・・

「雄一、私と付き合つて」

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか」

「……私は諦めない。ずっと雄一のことが好き」

ふう・・・、しじうちやんつて一途だよねえ～

・・・なんであんなやつのことが好きなんだろ？

「……私には雄一しかいない。他のひとなんて、興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから今からテーートに行く」

「ぐあつ！放せ！やつぱりこの約束はなかつたことこ  
ああつ！」

負けたくせにみつともないのでスタンガン（10万ボルト）を投げ  
つけてやつた

「私はしようちゃんの味方だよ。とりあえず、この手錠にスタンガンをもつとけば逃げようとしても捕まえられるから

「……朔夜、ありがとう」

ぐいつ つかつかつか

ショウジョウさんは氣絶している坂本の首根っこを掴み、教室を出て行つた

「……朔夜、そんなものどこで手に入れたの？」

と、今のやりとりをみていたのかFクラスのみんなが若干引いてる

「あつ・・・あははつ・・・、氣にしちゃいけないよ」

私は少し前まで裏の世界にいたんだからね、これくらいは朝飯前だよ　なんて口が裂けても言えないよね

教室にしばしの沈黙が訪れた、あまりの出来事に言葉がでないのだから

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

突然私達の耳に野太い声がかかる

音のした方向を見ると、そこには生活指導の鉄人（西村先生）（笑）が立つていた

「あれ？鉄人先生が私達になにか御用でもあるんですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習について説明しようと思つてな

・・・ん？ちょっと待つて？我が？我がFクラス？

「あめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担当が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『なにいつ！？』』』

Fクラス全男子生徒の悲鳴が聞こえる

そりやそうだよね、生徒指導の鉄人といえば、『鬼』の一ツ奈を持つほど厳しい教育をする先生だ。たしか・・・趣味は勉強、尊敬する人は一富金次郎と、理想的な生徒に教育をすると言われている

「いいか。確かにお前らはよくやつた。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかつた。でもな、いくら『学力が全てじゃない』と言つても、人生を渡つていく上では協力な武器の一つなんだ。全てではないといって、ないがしろにしていいものじゃない」

くつ、たしかに鉄人の言つてることはただしいよね・・・

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の『観察処分者』とA級戦犯だからな」

「残念だつたね、アキくん。まつ、頑張つて〜」

「後お前もだ。関根」

「ええつ！？なんですか！？」

「お前は一応B級戦犯だからな。去年なんか授業は寝て、授業中どこかにいなくなつたり、拳句の果てには学校行事には一回しか参加しなかつたそうじやないか」

くつ・・・、だつてだつて、学校行事なんかつまらないじやん！

「そりはこきませんよ！なんとしても監視の目をかいぐぐつて、今までどおりの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「そりですよ！なんとしても監視の目をかいぐぐつて、今までどおりの快適なスクール生活を送つてみせます！」

「・・・お前らには悔いを改めるという発想はないのか」

ため息まじりの台詞

「あえて言わせてもらいます鉄人先生……ないですっ！」

「僕もありませんっ！」

「はあ……、まったく、とうあえず明日から別に補習を一時間設けてやるわ」

「いつ……一時間だとつー？」

「私にはそんなものいりません、私が今もつともほつしているものは……睡眠時間です！」

「関根、そんな胸を張つて、いつか言ひやないぞ」

「ああいえば」ういやがつて……！

三ヶ月後にまた試召戦争を起こして、この教師から絶対逃げてやるう！

「さあーて、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも食べに行きましょうか？」

「え？ 美波、それは週末つて話じゃ……」

「へえー、あのアキくんが女の子とのデートの約束をしてたなんて……」

「だ、ダメです！ 吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええつー？ 姫路さん、それは話題にすら上がつてないよー？」

「おおー、みーちゃんも成長したねえー、前はあんなこといえないほど恥ずかしがつてたのに……、つてアキくんつて結構もてるんだね？」

「に、西村先生！ 明日からと言わす、補習は今日からやります」

！思い立つたが仮滅です！

「『吉田』だ、バカ」

「思い立つて釈迦が死んじゃうってどんなことわざなのアキくん・

・」

「そんなことはどうでもいいですか？」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが

「

言葉を区切つて鉄人はアキくんとみなみちゃん、みーちゃんを見てから

「無理ある」とは、今日だけは存分に遊ぶといい

そして一いや一いやと嫌な笑みを浮かべてそうじつた

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知つての狼藉だな！」

イエス！多分あの顔からしてそうだらうねえ

「いりなつたら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

アキくんつて卒業できるのだろうか・・・？

「アキ！こんな時だけやる気を見せて逃げよつたって、そういうのないからね！」

「ち、違うよ！本当にやる気が出てこねんだってばー。」

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

「姫路さん、それは雄一じやなくて僕とのー？」

？？

ビーハービーハービーで坂本がでてくるんだろうか？

「？？坂本君？なんのことですか？私はずっと前から吉井君の」と  
を

「アキ！いいから来なさい！」

「あがあつー美波、首は致命傷になるから優しく

」

やつぱりみなみちゃんもアキくんのことが・・・  
やつぱりアキくんつてもてるんだね～

「ほら、早くクレープ食べに行くわよー」

「わ、私と映画に行くんですねー！」

「いやああつー生活費がー僕の栄養があつー！」

いやいや、もともと生活費をゲーム代につぎ込むんだろう、なんて  
つっこみたかったが早々と連行されていった

「アキくんって本当に鈍感だよね、あそこ今まで言い寄られてわから  
ないって」

「まあ、それが明久じゅかのう

まつ、そなうなんだけねと秀吉くんと笑しながら私達の戦争は一旦  
終了した

## 第十九問（後書き）

「意見&アドバイス」感想のほどお待ちしております

## 闇話 私と秀吉へととの百合騒動！？（前編）

よつやく（三話へり）にしかなかつたよつな）Aクラス戦も終わつた  
ところ」と、今回は闇話を書いてみました

## 関話 私と秀吉へことの百合騒動！？

～SIDE明久～

「ふあ～、今日は早く学校に来ちゃつたよ」

珍しく早起きした僕はやることもなかつたので早く学校に登校してきた

Fクラスの扉の前に立つと、そこから一人の少女の声が聞こえてきた

『ふあつ！？やつ・・・・・りめえええ！！』

『なんじや 関根・・・・じがいいのかのう』

『あつ・・・・そこ・・・』

『こじじやの、こじが気持ちいいのじやな？』

『ああつ・・・・そこ・・・そこが気持ちいいのおーー』

な、な、なにこの会話！？

ま、まさか秀吉と朔夜つて・・・そういう関係！？

『ふにやあ・・・・気持ち良かつた・・・』

『それは良かつたのじや』

『あの・・・・わつ、また今度・・・・してくれる？』

『うむ、いつでもしてあげるのじや』

『ホント！？やつたー』

と、とりあえず落ち着くんだ僕。

普通に、ごく普通に教室に入れば

「　　お、おはよー」

「あー、アキくんおはよー、今日は早いねえー」

「おはよーうじや。畠久」

なんか朝夜の顔が少し赤い気がする

「そ、そういうば、一人はこんな朝早く来てなにしてるの?」

「ん? そうだねえ・・・いろいろと?」

「うむ、世間話とか、いろいろうじや」

い、いもうつて、わたくしのことも覚えてるのかな

### SIDE 朝夜

ん、なんかアキくんがおかしいような  
いや、いつもおかしいけど、いつもよつもおかしい気がする

「ねえ、なんか今日のアキくん変じやない?」

「うむ、たしかにうじやのうへー」

やつぱり秀吉くんもうつ思つてこたんだ

「おーうす」

「おはよーうじやあこまか」

「おはよー」

つと、そこに坂本達が教室に入ってきた

「ああ～。みんなおはよう～」

「おはようじゅん、姫路に島田に雄一よ」

「あ～、おはよう・・・・ひょつとい～？」

アキくんはみーちゃんとみなみちゃん、坂本をクラスの隅へ連れて行きなにかを話している  
一体なにを話してるんだろう？

「　　ええーつー？」

いきなりみーちゃんたちが大声をあげ驚きの表情をしていた  
本当に一体なにを話してるの、すつじへ気になるんですけどーー？

「　　・・・（じーつ）」「　　」「

えつ、なになに！？

なんでの四人は私と秀吉くんを交互に見始めたのー？

「　　・・・（じーつ）」「　　」「

な、なんか悪いことでも私したのかなつー？  
・・・なんか視線が痛いんだけど

「　　・・・（じーつ）」「　　」「  
「ええーーーーーなんのわっせからつーーー？」  
「べ、別にじうじうしないよ」

アキくんは氣まずそうにさつぽを向く

「あ、アリドアヨセハヤヒヤン。べ、別にビーフもしませんよ・・・」

顔を赤くしながら明後田の方向を向く

「あ・・・あうよ朔夜。べつ、別にビーフもしないわ」

明らかに嘘だとバレバレなんですかビー?

「で、朔夜。秀吉とあんなことをしてたってのは本当か?」

「いかほりはりで一ヤーヤしながら話しかけてくる。なんかムカつくなー」と、あんなことってなんなんだう?

「ちよ、雄一ーなにこいつちやつてゐのたー。そんなことほんこ・・・ぐふつ」

よし、とりあえずアキくんを行動不能にしといた。

アキくんがいると話が進まないからね

「そりですよ坂本君! そんなことをほんこ「あつ、みーちゃん。アキくんを保健室に連れて行かないと死んじゃつかもよ?」ええつ! ?・・・・わかりました。すぐ連れてきまーす!」

よし、これでアキくんとみーちゃんをこの場から除去に成功

「あうよ坂本! そんなことを本人達に「みなみちゃんもいかなくていいの? 保健室でみーちゃんとアキくんが二人きりだよ?」・・・。そうね。私も行ってくるわ」

よし、すべての除去に完了。

後は坂本から話を聞くだけだ！

「で、坂本？ あんないじってどんなこと？」

「ん？ なんだ、自覚がないのか？ 実は

」

ふむふむ・・・、はつ！？

「 と、明久から聞いたんだが？」

「 な、なななにそれ！？ そんなことやつてないよ！？」

「 そ、そうじや雄二！ そんなことするわけないじゃねつ・・・つて、なぜに百合なのじや？」

うーん、まあ、坂本と私とゆうひちゃん以外は秀吉くんは女の子扱いだからかな？

「 セウだよつ！ なんの関係でもないのにそんなことするわけないじやん！」

まあ、好きだけじや・・・

「 セウ！ ジヤ ゆ雄二！ ただワシは

秀吉くんが本当のじとを言おうとした瞬間、教室の扉の前で何かが噴出される音が聞こえてきた

ガラガラガラ

「 なつ・・・！？」

教室の扉を開けると、そこにはFクラスの全男子（アキくん、秀吉くん、坂本は除く）が鼻血を廊下に噴出しながら倒れこんでいた

「はあ・・・なんで」「いつなるんだか」

多分、教室内の私達の会話を聞いていた男子があんなことやこんなことを想像してこんなことになってしまったのだろう

「それで、結局真相はどうなんだ？」

坂本が呆れ顔でこちらに問いかけた

「ん~、いや、ただ私が秀吉くんに足のマッサージをしてもらひつてただけだよ？」「

「そうなのじや。朝登校してたら足が痛いと関根が言つておつたからのう、少しマッサージをしてあげただけなのじやが・・・まさかこのよつなことにならうとは思わんかったのう」「

この後、鉄人がやつてきてFクラス全員で廊下の掃除をさせられた  
ああ、アキくんもとりあえず掃除しどときました

その後、さくらんと誤解を解いたはずだったんだけど・・・騒動の翌

日

〔実はFクラスの関根朔夜と木下秀吉は百合関係だった！？〕

Fクラスの関根朔夜さんと木下秀吉さんは百合関係であるといつことが判明した

証人の吉〇明〇さんはこう語る

『前々から怪しいとは思つてたんですけどね。いや・・・まさか僕がめずらしく早く学校に登校したらなんと教室から甘い声が聞こえてくるんですよ。いやあ・・・やっぱり早起きは三文の徳ですね！』

と、いひおひしゃつしていました。

今回の掲載予定だつた、須川の謎、女装が似合ひそつた男子ランキングは次回掲載予定です

『『『・・・・・。』』』

私と秀吉くんへの視線が痛い

「あ・・・アキくん（明久）の馬鹿――――――！」

私と秀吉くんの絶叫は旧校舎から新校舎まで響き渡つた

・・・」の後アキくんがどうなったかは言つまでもないよね

閑話 私と秀吉へんとの百合騒動ー? (後編)

「J感想&a m a.-」意見などお待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2801x/>

---

バカと少女と召喚獣

2012年1月14日17時52分発行